

主題： 「2001年2月9日にハワイ州オアフ島の沿岸沖で発生した
合衆国船グリーンヴィル（SSN772）及び日本国内燃機関船
えひめ丸間の衝突の周辺状況に対する審問委員会の審理」

c. 家族扶養者巡航. 海軍関係者の民間人招待客及び親戚の為（証拠書類 12, 8 c 章）

d. 「行け海軍」. 海軍が後援している民間人若人のグループ（海軍海上士官候補
コ一等）を含む海軍の下士官及び士官プログラムに興味を持つ人達、あるいはその募集過
程に影響力を持つ人々の為 .（証拠書類 11, 0405 b（6）章, 0405 j）

e. 合同民間人説明会議訪問. 国防長官招待客（証拠書類 11, 0405 b（9）（a）章、
0405 g）

f. 海軍長官招待者巡航. 海軍長官に招待されたビジネス、産業、教育の分野のトッ
プ・レベルの指導者達の為（証拠書類 11, 0405 b（9）（b）章 0405 h）

g. 海軍招待客巡航. これまで海軍との接触を持った事の無い中堅レベルの重役達の
為（証拠書類 11, 0405 b（9）（c）章、0405 j）

h. DV（著名人招待）巡航.（又はVIP）巡航（証拠書類 11, 0405 b（9）（d）章、0405 i）
以下の章では上記の最後にある種類の民間人招待客の為の巡航、DV 巡航に焦点を宛て
て討議する.

297. DV 体験航海の為の資格基準 海軍省指示書にはこのDV 巡航に関しては殆
ど特定の資格基準は包含されていない.

a. SECNAVINST 5720.44A 中の「広報活動方針及び規定」には、DV 巡航に支援を受
けられるのは、海軍長官招待巡航に招かれる人々と同タイプの人達である」と書かれてい
る. この同じ指示書の別章では、「DV 巡航は、合同民間人説明会議訪問、海軍省、海軍招
待客巡航から落ちた「著名人達」の為の巡航」とある.（証拠書類 11, 0405 b（9）（d）章、
0405 i）

b. 体験航海の機会には限度が有るため、一人の招待客に自分の経験を仲間関係にあ
る他者達に伝えてもらう事を考慮に入れる. 従って、招待客の選定の重要な要因は市民、職
場、社会組織におけるその人物の関与の度合である.（証拠書類 11, 0405 e（2））

主題： 「2001年2月9日にハワイ州オアフ島の沿岸沖で発生した合衆国船グリーンヴィル（SSN772）及び日本国内燃機関船えひめ丸間の衝突の周辺状況に対する審問委員会の審理」

c. OPNAVINST 5720.2L の「合衆国海軍船上の体験航海」中には、広報活動の目的の為に体験航海が許される個人や団体の例が定められており、社会奉仕クラブ、民間人説明会グループ、市民グループ、海軍連盟、あるいは商業的、職業的な仲間も含まれている。（証拠書類 12、8b 章）

298. D V 体験航海の為の推薦 海軍省の D V 体験航海参加者選択の指標は以下の通りである：

a. 海軍の情報部長（CHINFO）は、海軍の地域調整者及び海軍長官事務所の高官によって推薦された候補者のリストを保持しておくこと。（証拠書類 11、0405i 章）

b. その他の広報活動目的の為に体験航海要請は行動指揮系統を経由して CHINFO に提出すること。（証拠書類 12、8b 章）

c. CHINFO はタイプ司令官達（TYCOMs）にこの推薦リストを周期的に送付しておき、TYCOMs は体験航海が終了した段階で CHINFO にそれを知らせる。（証拠書類 11、0405i 章）

299. D V 体験航海の承認権限

a. 海軍作戦部長は、合衆国海軍太平洋艦隊司令官（CINCPACFLT）に彼の行動管制下の船舶についての広報活動を目的とした民間人招待客の体験航海を承認する権限を委ねている。（証拠書類 12、11a（1）章）

b. OPNAVINST 5720.2L は、ある特定の体験航海を承認するにあたって、合衆国海軍太平洋艦隊司令官（CINCPACFLT）がこの権限を TYCOMs（タイプ司令官達）にさらに委ねることを許している。（例：非海軍省関連局の政府の民間人雇用者で、公用で無い場合；家族扶養者の巡航）この許可は、広報活動目的の為に行なわれる民間人招待客体験航海については、これを含まない。（証拠書類 12、11a（4）章）

300. D V 体験航海の日程組み 海軍省の全招待客体験航海用の日程作成に関する指標は以下の通り：

主題： 「2001年2月9日にハワイ州オアフ島の沿岸沖で発生した合衆国船グリーンヴィル（SSN772）及び日本国内燃機関船えひめ丸間の衝突の周辺状況に対する審問委員会の審理」

a. 体験航海は定期的に組まれた行動スケジュールの枠組みの中で行なわれる事。
（証拠書類 11、0405a 章；証拠書類 12、8a 章）

b. 体験航海は招待客の要請を受け入れる目的の為のみに行なわれてはならない。
（証拠書類 11、0405a 章）

c. 体験航海には行動予定に受け入れられない調整を必要としてはならない。（証拠書類 12、4a 章）

d. 体験航海は船上の行動に干渉するものであってはならない。（証拠書類 12、4a 章）

e. 体験航海はその船の船（艦）長の合意を得なくてはならない。（証拠書類 12、8a 章）

301. 自己防衛 下記の海軍省の方針が全招待客体験航海に適用される：

a. 全ての招待客訪問は区分無しの基盤で許可されるものとする。招待客達は出発前のあるいは乗船歓迎要旨説明の機会に、安全機密に関わる制限について説明を受けることとし、その中には個人使用的なカメラの使用への制限も含むものとする。（証拠書類 11、0405 e（4）章；証拠書類 12、8a 章）

b. 招待客達は、自宅からの往復の旅費は自己負担するものとし、参加者達は体験航海中の生活経費及び付帯経費の払い戻しを海軍に対して行わなければならない。（証拠書類 11、0405 e（1）章）

c. 招待客達には、彼らが良好な健康状態に無い限り体験航海を行なわないようにと注意をして置くべきであり、又、船上での緊急医療及び歯科施設の利用についての説明をしておくべきものとする。（証拠書類 11、0405 f（4）（5）章）

d. 全招待客の為の必要予防策を取っておくものとし、その中には、通常では陸上では遭遇することの無いような危険性が海軍の船では呈示する場合もあり、自己の安全の為の非常に慎重な注意が必要である事を前もって客達に知らせておくことも含まれる。（証拠

主題： 「2001年2月9日にハワイ州オアフ島の沿岸沖で発生した合衆国船グリーンヴィル（SSN772）及び日本国内燃機関船えひめ丸間の衝突の周辺状況に対する審問委員会の審理」

書類 11、0405 f (5) 章；証拠書類 12、8a 章)

302. 潜水艦乗船によるDV体験航海 SECNAV 及び OPNAV 指示書には、潜水艦上でいかに民間人招待客の体験航海を行なうかに関する特定方針は一切含まれていない。SECNAVINST 5720.44A 中に含まれているDV巡航規定は唯一航空機上での体験飛行に言及しているのみである。潜水艦がいかに「定期的な行動予定の枠組み」の中で体験航海を行なうか、あるいは、行動予定への「受け入れられない調整」とは何であるのかに関する指標は無い。

太平洋艦隊の指標と指針

303. 太平洋艦隊司令官 OPORD 201「訪問者の体験航海」により、太平洋艦隊は海軍船舶上での民間人体験航海を「強力に奨励しかつ支援」している。それは、「かかる体験航海が海軍に対する及びその任務に対する公衆の認識度を高めるにあたっての手段」であるとの理由による。（証拠書類 14）

304. 太平洋艦隊司令官 OPORD 201 により、DV体験航海の為の承認申請は、OPNAVINST 5720.2L の「中で示されている承認授与権限者に対して送付する為に、行動指揮系統を通して太平洋艦隊司令官に提出されるべきこと」とある。（証拠書類 14）

305. 太平洋艦隊司令官指示書 5720.2M「合衆国船上での体験航海」により、太平洋艦隊下の TYCOMs（タイプ指揮官達）は、（太平洋潜水艦隊司令官、太平洋航空部隊司令官、太平洋水上部隊司令官）は OPNAVINST 5720.2L の「中に含まれている基準に基づき」、彼らの行動上管制下にある全海軍船舶への訪問、及びそれらに乗船しての体験航海を承認する為の権限をすでに委ねてあると認識している。太平洋艦隊司令官指示書 5720.2M はこの基準が何なのか（手順上のものなのか、本質的なものなのか、あるいはその両方なのか）についてはこれ以上定義していないし、説明もしていない。（証拠書類 13）

306. 太平洋艦隊司令官の指示書には、潜水艦上でいかに民間人体験航海を行なうかについては特定のな方針も指針も含まれていない。（証拠書類 13、14）

太平洋潜水艦隊指示書

主題： 「2001年2月9日にハワイ州オアフ島の沿岸沖で発生した
合衆国船グリーンヴィル（SSN772）及び日本国内燃機関船
えひめ丸間の衝突の周辺状況に対する審問委員会の審理」

307. COMSUBLANT/COMSUBPAC OPORD 200/201、Annex F 「広報活動」により、太平洋潜水艦隊の艦長達は「隊の広報活動プログラムを支援する義務を課せられている。」この中には広報活動を支援する、彼らの指揮下にある有資格士官を任命する事も含まれている。（証拠書類 28, 1b 章、 2a 章）

308. COMSUBLANT/COMSUBPAC OPORD 200/201 には、VIP 体験航海（例：「名前を貰った所の委員会、海軍連盟、将校達、政府役人達等に所属する人達等」の航海）への要請は裏書き支持を受ける為に親潜水艦グループに提出し、それから、太平洋潜水艦隊司令官に送付する事を義務付けている。

a. OPORD 2000/201 によって、太平洋潜水艦隊司令官が広報活動の為に行なわれる民間人体験航海の為に承認権限者である。

b. これは、OPNAVINST 5720.2L 中に含まれている委譲規定と反する。（証拠書類 12, 11a (1) 及び (4) 章; 証拠書類 28, 5 a 章）

309. 太平洋艦隊司令官の指示書中に潜水艦上でいかに民間人体験航海を行なうかについて特定のな方針や指針を含んでいるものは一切無い。（ワーナー少佐の証言 1498-99, 1506-07, 1509, 1512-13 頁）

太平洋潜水艦隊の指標と方針: 1999 年及び 2000 年の体験航海数

310. 太平洋艦隊の広報活動プログラムは現在下記の主要課題分野における一般大衆への情報伝播に焦点を宛てている：

a. 攻撃型潜水艦への需要対実際潜水艦の数の間の増大しつつある不均衡；

b. 4 隻の弾道弾ミサイル潜水艦を誘導ミサイル潜水艦に変換する事の軍事的及び経済的価値；

c. 原子力潜水艦部隊の為に募集の必要性；

d. 訓練を受けた、有資格海員の維持の必要性；

主題： 「2001年2月9日にハワイ州オアフ島の沿岸沖で発生した合衆国船グリーンヴィル（SSN772）及び日本国内燃機関船えひめ丸間の衝突の周辺状況に対する審問委員会の審理」

e. アメリカ人民、議会、その他の軍隊支部及び同盟国との連携維持の重要性

(コネツニ少将の証言 755-60 頁; ワーナー少佐の証言 1496-97 頁; 証拠書類 15)

311. 民間人招待客の体験航海は太平洋潜水艦隊の総括的な広報活動の一部である。

a. 太平洋艦隊の2000年向け広報活動指標には、実演展示は潜水艦のユニークな能力を伝える効果的な方法であるとするメッセージが含まれていた。

b. 1999年中の広報活動努力の査定を行なうにあたり、太平洋潜水艦隊司令官は部隊に対して、「我々はメディア、議会のスタッフの面々、及び主要募集対象と代表者達を含む主要な観客達の間における理解を増加させる為に体験航海の提供を続行する。」と話した。

(証拠書類 15)

312. 1999年に太平洋潜水艦隊司令官は54回の民間人体験航海(全部類)を行い、合計1、152名の招待客を接待した。これらの合計数のうち、26航海、785名の招待客体験航海はトライデント型潜水艦の上で行なわれた。そして29航海、367名の招待客は速攻型潜水艦で体験航海した。民間人体験航海は全て太平洋潜水艦隊のホームグラウンドの港であるパールハーバー、サンディエゴ、バンゴー及び日本国の横須賀で行なわれた。

313. 2000年に、太平洋潜水艦隊司令官は50回の民間人体験航海(全部類)を行い、1、287名の招待客を接待した。これらの合計数のうち、27航海、895名の招待客体験航海はトライデント型潜水艦の上で行なわれた。そして23航海、392名の招待客は速攻型潜水艦で体験航海した。民間人体験航海は全て太平洋潜水艦隊のホームグラウンドの港で行なわれた。

(証拠書類 30)

314. 民間人招待客体験航海の一航海毎の延べ人数は速攻型の場合が1999年で13名、2000年で17名であった。(証拠書類 30)

太平洋潜水艦隊の招待客体験航海プログラムと手順

主題： 「2001年2月9日にハワイ州オアフ島の沿岸沖で発生した
合衆国船グリーンヴィル（SSN772）及び日本国内燃機関船
えひめ丸間の衝突の周辺状況に対する審問委員会の審理」

315. 太平洋潜水艦隊の体験航海プログラムは在ハワイの太平洋潜水艦隊広報事務所を通じて、同事務所により調整されている。（ワーナー少佐の証言 1502 頁）

a. 太平洋潜水艦隊広報活動事務所は、特技番号 1650 を付与された広報活動の専門家である、部隊広報活動士官（PA0）のリーダーシップのもとに活動し、もう二人の特技番号 1650 を付与された広報活動士官が、バンゴーとサンディエゴのそれぞれの勤務地で、太平洋潜水艦隊に配属され勤務している。（ワーナー少佐の証言 1494-95, 1507 頁）

b. 太平洋潜水艦隊では現在の所、潜水艦小艦隊に隷属任務の PA0 広報活動士官を置くことは要求していない。（ワーナー少佐の証言 1494-95, 1507 頁；証拠書類 29）

316. 潜水艦体験航海の為の資格の決定を行なうにあたっては、太平洋潜水艦隊の PA0 が、推薦されている個人あるいは団体が太平洋潜水艦隊が掲げている五つの広報活動主要課題のうちのどれか一つでもに関して、大衆の認識度を高める影響力を持っているか、あるいはその援助が出来る人達であるかを基準にして決める。過去 2 年間に太平洋潜水艦隊による体験航海に出た人々の例を上げると、スポーツ界の顔；潜水艦がその名前を貰った市及び州からの団体；地方及び全国のマスコミ、テレビ、映画界の代表を含む；議会；国防省；国務省の役員；海軍連盟；その他の団体（例：日米海軍友好協会）（コネツニ少将の証言 742 頁；ワーナー少佐の証言 1499-1502, 1514-15 頁；証拠書類 30）

317. 体験航海を手配するにあたって、太平洋潜水艦隊広報活動事務所は体験航海を行なう推薦を受けている個人もしくは団体について予備情報を集める。

a. 太平洋潜水艦隊の広報活動事務所は潜水艦小艦隊に連絡を取り、提案されている日と合計人数に関する基本情報を伝える。そしてこの体験航海を支援する潜水艦があるか否かを問い合わせる。

b. 小艦隊は行動予定表を検討し、彼らの船が特定体験航海の支援を行なう事が出来るか否かを返答する。

（ワーナー少佐の証言 1502-10, 1518 頁. スニード大佐の証言 927-28 頁）

主題： 「2001年2月9日にハワイ州オアフ島の沿岸沖で発生した
合衆国船グリーンヴィル（SSN772）及び日本国内燃機関船
えひめ丸間の衝突の周辺状況に対する審問委員会の審理」

318. 太平洋潜水隊広報活動事務所は提案されている体験航海が「定期的に予定されている行動の枠内」にあるかどうかの決定をする為の行動予定表の検討は行なわない。かわりに、太平洋潜水艦隊広報活動事務所は、特定潜水艦の行動状況及び予定が提案されている日や航海者の人数を支援出来るか否かに関して、小艦隊の決定に全般的な信頼を置く。（ワーナー少佐の証言 1502-10、1518 頁。スニード大佐の証言 927-28 頁）

319. 太平洋潜水艦隊は、体験航海を接待する為に選ばれた潜水艦の為に下記の特定の指標を提供している：

- a. 体験航海は秘区分となっていないレベルのみに制限されている；
- b. 海軍原子力推進機関情報へのアクセス及びその開示は許可されていない；
- c. 海軍の制限されているデータ/正式に制限されているデータの開示は許可されていない；
- d. 暗号に関する作業が行なわれている間は通信室へのアクセスは許可されていない；
- e. 日常的作業中のソーナーへのアクセスは許されている；
- f. 魚雷室へのアクセスは許されている。

（ワーナー少佐の証言 1498-99 頁；証拠書類 32）

320. 民間人体験航海を行なうにあたり、太平洋潜水艦隊の方針として行事及び行動の予定は各艦長の裁量に委ねることになっている。得られる時間の都合及び観客の都合を基盤として行事を予定するにあたって、艦長には広い範囲の自由が与えられている。太平洋潜水艦隊からの唯一の指標は、潜水艦は「今日のプロフェッショナルな海員を陳列すること」を奨励するというものである。（グリフィス少将の証言 227-28 頁；ワーナー少佐の証言 1498-99, 1512-13 頁；証拠書類 1、添付書類 32；証拠書類 32）

321. 2月9日より以前には、太平洋潜水艦隊の体験航海を行なっている潜水艦が訓練行動

主題： 「2001年2月9日にハワイ州オアフ島の沿岸沖で発生した合衆国船グリーンヴィル（SSN772）及び日本国内燃機関船えひめ丸間の衝突の周辺状況に対する審問委員会の審理」

として緊急浮上を実演することは太平洋潜水艦隊の通常の慣習であった。（コネツニ少将の証言 761-65, 786 頁;証拠書類 31, 31, 32))

322. 太平洋潜水艦隊の PAO 事務所は、正式な DV 体験航海に関するフィードバック機構は何も維持されていない。体験航海に関する「習得した教訓」、提案、あるいはアイデアは、エスコートをした士官達あるいは艦長との事後の会話などを通して太平洋潜水艦隊の PAO が受け取る程度である。太平洋潜水艦隊中を通して DV 体験航海経験に関する情報のフィードバックを散布したり情報を分け合ったりする正式な手段は存在していない。（ワーナー少佐の証言 1512-13 頁; コネツニ少将の証言 764-65 頁)

323. 太平洋潜水艦隊は典型的なやり方として、潜水艦上での体験航海には、エスコートの士官を一名民間人招待客達に任命する。エスコートは通常訪問者のレベルに合わせて選定される。エスコートの役割は、主に、招待客に対して航海の連続性を提供すること、合わせて、船の生命線以外の質問を受け止めることである。エスコート士官は通常は、航海中の潜水艦の動作の安全行為においては役を担わない;つまり、これは艦長や乗組員など、彼らの船について一番良く知っている者達に課せられた任務である、（ワーナー少佐の証言 1524-25 頁)

グリーンヴィル・ツアー及び 1999 年及び 2000 年中の体験航海

324. ワドル中佐の艦長としての任期期間に、グリーンヴィルは太平洋潜水艦隊の広報活動プログラムを支援した。同船はツアー及び体験航海の為に人気ある潜水艦であった。（コネツニ少将の証言 784 頁;スニード大佐の証言 927-28 頁;証拠書類 31)

325. 太平洋潜水艦隊の広報活動事務所の記録にはグリーンヴィルが 1999 年と 2000 年中に少なくとも港内ツアーを 20 回行ない、300 人以上の訪問者接待したとある。この中には、ロシアからの代表団、アジア太平洋安全研究センターのクラス、合衆国空軍ワー・カレッジ、メイク・ア・ウィッシュ財団、数名の著名人（例：レーシングカー・レーサーのアンディー・グラナテリー、ロバート・ケネディー・ジュニア）が含まれている。（コネツニ少将の証言 784 頁;証拠書類 31)

326. 太平洋潜水艦隊の広報活動事務所の記録には、グリーンヴィルが 1999 年と 2000 年に 4 回の民間人招待客体験航海を接待したとある。中でも意味があるのは：

主題： 「2001年2月9日にハワイ州オアフ島の沿岸沖で発生した
合衆国船グリーンヴィル(SSN772)及び日本国内燃機関船
えひめ丸間の衝突の周辺状況に対する審問委員会の審理」

a. 1999年2月26日、グリーンヴィルは海軍次官に伴なわれたティッパー・ゴア夫人(船の後援者)を体験航海に案内した。

b. 1999年9月11日、6名の合衆国下院議員はグリーンヴィルに乗艦し体験航海した。

c. 2000年6月30日、グリーンヴィルはカリフォルニア州サンタ・バーバラから(映画「タイタニック」の監督)ジェームス・キャメロンを含む25人の民間人招待客を体験航海に案内した。(証拠書類31)

327. 2000年6月30日の招待客体験航海の間には、グリーンヴィルは上下航行及び緊急浮上航行を行なった。招待客たちはグリーンヴィルでの巡航を記念する深海水の標本とその他の記念品を提供された。(スローン中尉の証言 956-57頁、証拠書類31)

2001年2月9日の合衆国船グリーンヴィルの体験航海の手配

328. 2000年3月頃から、海軍連盟とある私企業は合衆国船ミズーリー(BB63)財団の為のゴルフ・コンペを組織しようと企画していた。この企画中のゴルフ・コンペについて話し合う会合の席上で、数人かの民間人は海軍の体験航海プログラムの事を知り、参加への興味を表明した。(証拠書類65)

329. ゴルフ・コンペを準備していた人達の中の一人が元合衆国海軍太平洋軍司令官リチャード・マッキー大将(退役)を知っていたので、体験航海を要請するのに彼に一役かって貰う事となった。(添付書類65)

330. マッキー大将は2000年9月に太平洋艦隊副司令官に電話をかけ、「高額の金を動かしている会社重役達」の為の潜水艦ツアー及び体験航海を要請した。明らかに、マッキー大将はこのグループには海軍長官も関心を持っていると話したらしい。この体験航海の為に要請された日々は2001年1月中旬であった。この情報は太平洋艦隊の幕僚によって潜水艦隊の広報担当官に送られた。(ワーナー少佐の証言 1528-29頁; 証拠書類32)

主題： 「2001年2月9日にハワイ州オアフ島の沿岸沖で発生した
合衆国船グリーンヴィル(SSN772)及び日本国内燃機関船
えひめ丸間の衝突の周辺状況に対する審問委員会の審理」

331. 潜水艦隊の広報担当官はこの情報に関する即座の行動は取らなかった。それはこの要請された日々というのが3ヵ月も先のことであったからであった。潜水艦隊の広報担当官がこの要請について手配を始める前に、ゴルフ・コンペがキャンセルあるいは延期になったという理由でこの要請は撤回された。(ワーナー少佐の証言 1528-31 頁; 証拠書類 65)
332. ゴルフ・コンペはもう 2001 年 1 月の予定から外されたが、このコンペに係わっていた民間人の何人かは未だ潜水艦体験航海には興味を持っていた。(証拠書類 65)
333. 2001 年 1 月 23 日もしくはその頃、太平洋潜水艦隊司令のコネツニ少将は 2 月 8 日もしくは 9 日に約 10 名の民間人招待客の体験航海が許可されるようにという要請の電話をマッキー大将から受けた。(コネツニ少将の証言 742 頁; 証拠書類 32)
334. 潜水艦隊司令官は、「瀬戸物を割る必要は無い」という司令と共に、この要請を潜水艦隊の広報担当事務所に伝えた。コネツニ少将の意図は、潜水艦のスケジュールを体験航海を受け入れるだけの為に再編成するなということであった。(コネツニ少将の証言 742 頁; ワーナー少佐の証言 1504, 1526 頁; 証拠書類 32)
335. 希望の日々と大凡の人数のこの情報で太平洋潜水艦隊司令官広報担当事務所は部隊をつぶさに聞きまわり、潜水艦が空いているかどうか調べた。第一潜水艦隊からの返答はグリーンヴィルがこの体験航海を支援する為に待機しているというものであった。(コネツニ少将の証言 742-43 頁; ワーナー少佐の証言 1504-05 頁; 証拠書類 32)
336. 1 月 26 日、太平洋潜水艦隊の広報担当官はマッキー大将に対して彼の招待客達は 2 月 9 日の昼間の航海への支援を受けることが出来ると伝えた。マッキー大将は最初の 13 名の民間人招待客のリストを含んだファックスを 1 月 30 日に太平洋潜水艦隊の広報業務事務所に送った。このファックスにはマッキー大将もグリーンヴィルと共に出航するかも知れないと記してあった。(証拠書類 32)
337. 太平洋潜水艦隊の幕僚はグリーンヴィルで体験航海する予定の民間人招待客達の背景情報に関しては殆どといって良い程知らなかった。潜水艦隊の広報担当官は彼らがテキサスのエネルギー資源関連会社の重役達であると大体の知識を持っていた。太平洋潜水艦隊の広報担当官は主張されていたこのグループに対する海軍長官の関心について、あるいは招待客のマッキー大将との関係についてはそれ以上の質問はしなか

主題： 「2001年2月9日にハワイ州オアフ島の沿岸沖で発生した
合衆国船グリーンヴィル(SSN772)及び日本国内燃機関船
えひめ丸間の衝突の周辺状況に対する審問委員会の審理」

った。太平洋潜水艦隊にとっては元太平洋軍総司令官が体験航海のスポンサーであつたというだけで十分であつた。(ワーナー少佐の証言 1514, 1530-31, 1536 頁)

338. 2月5日、太平洋潜水艦隊の広報担当官はマッキー大将及びその他の体験航海グループのメンバー宛てに乗艦歓迎/ご案内の資料を eメール及びファックス送信にて送付した。(証拠書類 32)

339. コネツニ少将は2月5日の週は日本におり、従い、この民間人招待客に体験航海中同伴する予定は一切していなかった。太平洋潜水艦隊幕僚長のブランドヒューバー大佐は2月5日に太平洋潜水艦隊の広報担当官に対してこの体験航海要請の件に関する最新情報を求め、又、「自分は同伴すべきか？」と尋ねた。(コネツニ少将の証言 741-43 頁; ワーナー少佐の証言 1522-23 頁; 証拠書類 32)

340. 太平洋潜水艦隊の広報担当官はブランドヒューバー大佐に最初の招待客リストを提供した。そして、太平洋潜水艦隊の他の幕僚がエスコート士官として航海に参加の関心を表明している旨を伝えた。広報担当官はこの体験航海ではブランドヒューバー大佐の出席が絶対に必要というものではないと意見を述べた。(ワーナー少佐の証言 1522, 1532, 1534-35 頁; 証拠書類 32)

341. 太平洋潜水艦隊の広報担当官と体験航海の事で話し合った後、ブランドヒューバー大佐はこの民間人招待客達に同伴する事を決めた。(ワーナー少佐の証言 1522-23 頁; 証拠書類 32)

342. 2月7日、太平洋潜水艦隊の広報担当官はパール・ハーバー海軍基地の通行許可及び身分証明書事務所に対して、2月9日にグリーンヴィルで体験航海を予定している14名の民間人(及びマッキー大将)に基地への通行を要請した覚え書きを送付した。(証拠書類 32)

343. 2月7日、太平洋潜水艦隊司令官の伝達 071700Z 2月00(誤り)により、グリーンヴィルは2月9日に民間人招待客を体験航海させる為の正式許可と権限を与えられた。(証拠書類 32)

主題： 「2001年2月9日にハワイ州オアフ島の沿岸沖で発生した
合衆国船グリーンヴィル(SSN772)及び日本国内燃機関船
えひめ丸間の衝突の周辺状況に対する審問委員会の審理」

344. 2月8日の朝、ワドル中佐はマッキー大将のグループとは別の二人の民間人招待客の為にグリーンヴィルの港内ツアーを提供していた。ワドル中佐はこのカップルに翌日の招待者体験航海の為にグリーンヴィルに参加するようにと招待し、彼らは同意した。(証拠書類 64)

345. 2月8日、グリーンヴィルの副長との電話会話で、太平洋潜水艦隊の広報担当官は初めてグリーンヴィルのORSE訓練の航海期間開始は2月11日まで延期となっていた事を知り、同船は2月9日に招待者体験航海を支援という唯一の目的の為に航しようとしていた事を決めた。(ワーナー少佐の証言 1509頁)

a. この時、太平洋潜水艦隊の広報担当官はこの状況は「通常通り予定された行動の枠内」であると考えた。潜水艦スケジュールの「例外的に柔軟性のある」性質から考え、太平洋潜水艦隊の広報担当官はこの変更が「他の体験航海のどれよりもダイナミックであるという訳では無い」と決めた。(ワーナー少佐の証言 1508-12頁)

b. 太平洋潜水艦隊の広報担当官は、グリーンヴィルの2月9日の出航が唯一招待客体験航海を支援する為のみであることに関して幕僚長にも太平洋艦隊の幕僚の他の誰にも通告しなかった。(ワーナー少佐の証言 15101, 523頁)

346. 2月8日、ワドル中佐は太平洋潜水艦隊の広報担当事務所を訪れた。

a. ワドル中佐は自分は、そしてきっと彼の乗組員も、2月9日にコネツニ少将が民間人招待客に同伴されない事に失望していると語った。太平洋潜水艦隊の広報担当官は、グリーンヴィルがコネツニ少将が出航するつもりでおられるとの印象を持っていたのであれば、と謝った。何故なら、少将はこのグループに同伴する予定は一切無く、実際の所少将は日本に居られるからであると。

b. 太平洋潜水艦隊の広報担当官はワドル中佐にブランドヒューバー大佐が出航される意向なので、乗員達は新しい太平洋艦隊の幕僚長が観察しておられることを知れば、彼らの能力を披歴することが出来るであろうと言った。

c. 太平洋潜水艦隊の広報担当官は、民間人招待客について彼が知っている事をワドル中佐に知らせた。招待客の何名かが彼の出身地のテキサス州からであると知って、ワドル中佐は感激したように見えた。

d. ワドル中佐とのこの会談の約一時間後、太平洋潜水艦隊の広報担当官は、マッキー大将がグリーンヴィルによる航海には出ない旨を伝えられた。(ワーナー中佐の証言 1520-22頁)

主題： 「2001年2月9日にハワイ州オアフ島の沿岸沖で発生した
合衆国船グリーンヴィル(SSN772)及び日本国内燃機関船
えひめ丸間の衝突の周辺状況に対する審問委員会の審理」

347. マッキー大將がスポンサーした招待客達は太平洋潜水艦の賠償請求権放棄及び免責の用紙を完了した。ワドル中佐に体験航海に招待されたカップルの方はそれらの用紙への書き込みを完了しなかったようである。(証拠書類 32)

2月9日の出来事

348. 太平洋潜水艦隊の日程表では当初は広報担当官が民間人招待客達をニミッツ・ゲートで07時15分に迎え出る必要有りとしていた。民間人招待客達は時間より早く到着した。(ワーナー少佐の証言 1523頁; 証拠書類 32)

349. 招待客達はS-21埠頭に案内され、グリーンヴィルの艦長、副長そして前任海曹によって出迎えられた。ブランドヒューバー大佐も又この時に到着。招待客達は最初の埠頭についての説明を受け、それから潜水艦への乗船を始めた。(ブランドヒューバー大佐の証言 902頁、コフマン海曹長の証言 1331-32頁)

350. グリーンヴィルの中に入ってから後は、招待客達は乗員食堂に案内された。この時、招待者達は基本的な安全性及び医療に係わる説明を受けた。(避けなければならない区域についての説明も含む)又、グリーンヴィルの歴史もこの時に説明された。(メドー少佐の証言 1297頁; コフマン海曹長の証言 1331-32頁; 証拠書類 65)

351. これらの説明の後、そしてグリーンヴィルの出航の開始後に招待客達は乾舷の方にエスコートされ、そこで救命胴衣を身に着けた。彼らはホスピタル(H)地点に至るまで、デッキを動かさなかった。招待客達はこの時点で艦内に招じ入れられた。(メドー少佐の証言 1927頁)

352. 招待客達は8人ずつの二組に分けられた。メドー、プリチェットの両名が招待客達の案内護衛役として任命されていた。(メドー少佐の証言 1298頁; プリチェット大尉の証言 1356頁; 証拠書類 65)

主題： 「2001年2月9日にハワイ州オアフ島の沿岸沖で発生した
合衆国船グリーンヴィル(SSN772)及び日本国内燃機関船
えひめ丸間の衝突の周辺状況に対する審問委員会の審理」

353. グリーンヴィルの外海に向けての水上移動の間に招待客達は小さなグループに分かれて順に艦橋を見学した。(ワドル中佐の証言 1705-06 頁;
メドー少佐の証言 1298 頁; 証拠書類 65、66)

354. 民間人招待客達は、肝要な操艦制御及び部署の全てにおいて、有資格当直人の監督下で、潜水艦の潜水操作に参加した。(スローン大尉の証言 952 頁)

355. 招待客達は前方部分へのツアーを受けた。彼らは9人一組の寝台区域、補助機械室、魚雷室、ソーナー室、そして発令所を見学した。各区域では、水兵達がそれぞれの自分達の任務と責任について説明を行なった。(メドー少佐の証言 1298 頁;
プリチェット大尉の証言 1356 頁; 証拠書類 64、65)

356. 発令所にいた間に、招待客達は潜望鏡を見せて貰い、又、操舵員の直接監督のもとで操舵を取る事も許された。ソーナー室では、鯨の鳴き声のソーナー録音が彼らの為に再生された。(メドー少佐の証言 1298 頁; スローン大尉の証言 952 頁; プリチェット大尉の証言 1356-57 頁; MM 一等兵曹ハリスの証言 1251 頁; 証拠書類 64、65)

357. 招待客達は魚雷筒からの水「散弾」の発射を観察した。(メドー少佐の証言 1298 頁)

358. ツアーの間、護衛士官達は民間人招待客達からの必要要請には全て応じた。(例えば、手洗いに連れて行く、飲み物を取りに行く、船酔いの人が横になれるような簡易台を探す等)(プリチェット大尉の証言 1356 頁)

359. 約10時45分に、プリチェット大尉は彼のグループの招待客を前任士官食堂に案内した。彼らはそこで艦長及びブランドヒューバー大佐と共に昼食を取った。(プリチェット大尉の証言 1357 頁; ブランドヒューバー大佐の証言 836 頁)

360. 第一のグループが食事を終えた後で、メドー少佐は彼のグループの招待客達を前任士官食堂に案内した。彼らはそこで、約11時45分から開始して、副長と共に昼食を取った。(メドー大尉*の証言 1298 頁)

主題： 「2001年2月9日にハワイ州オアフ島の沿岸沖で発生した
合衆国船グリーンヴィル(SSN772)及び日本国内燃機関船
えひめ丸間の衝突の周辺状況に対する審問委員会の審理」

361. 11時から11時30分の間にグリーンヴィルは深海の海水の標本を取得する為に試験深度に航行した。これらの標本は体験航海の記念品として招待客達に渡される為のものであった。(ワドル中佐の証言 1685-86, 1786 頁; 証拠書類 1, 添付書類 24 (航泊日誌); 証拠書類 65)

362. 昼食時間の後、両グループは上下操航、高速操航、それに緊急浮上操航を含むそこに至るまでの諸々の過程行動を観察する為に発令所へと導かれた。(メドー少佐の証言 1298-99 頁; プリチェット大尉の証言 1357 頁; 証拠書類 64, 65)

363. 午後の行動の間の発令所内の当直立員、民間人招待客、及び護衛士官達の合計数は25から30人の間であった。(推定)水雷攻撃戦闘配置の場合にはグリーンヴィルは発令所に31名を配置する。(グリフィス少将の証言 233 頁; 証拠書類 1, 添付書類 33)

364. 午後の行動を発令所内で観察していた民間人招待客達は操艦位置区域の中、あるいはその周りの空いた場所に立っていた。特定的には、2~3名の招待客が航跡作図テーブルと航跡作図テーブルの間の操艦位置の後ろに立っており; 数人が船の管制責任組の真後ろ、発令所の前方左舷側に位置していた; 数人は哨戒長席台の真前に; そして数人は操艦位置と火器管制装置標示モニターの間の、前方右舷側にいた。(ブランドヒューバー大佐の証言 856, 865 頁; スローン大尉の証言 958-58 頁; FT 一等兵曹シークレストの証言 1555-56 頁; 二等兵曹クインの証言 1374 頁; 三等兵曹ブランディングの証言 1092 頁; 証拠書類 6)

365. 発令所内では、民間人招待客は静粛で、当直立員達の要請に留意しており、かつ常時適切な身振舞いを崩さなかった。(ワドル中佐の証言 1780 頁; ブランドヒューバー大佐の証言 856-72, 887 頁; スローン大尉の証言 979 頁; グリフィス少将の証言 232-33 頁)

366. 3名の民間人招待客が艦長からグリーンヴィルの最終行動である緊急浮上操航に参加するように勧められた。民間人招待客達はそれ以前の行動(例えば上下操航、高速操航、潜望鏡深度への浮上及び潜望鏡深度での時間、あるいは緊急潜航など)のどれ一つにも一切参加していなかった。

主題： 「2001年2月9日にハワイ州オアフ島の沿岸沖で発生した
合衆国船グリーンヴィル(SSN772)及び日本国内燃機関船
えひめ丸間の衝突の周辺状況に対する審問委員会の審理」

グリーンヴィルが緊急潜航の間400フィートに達した時、この3名は以下の部署にいた：

a. 一人の招待客はバラコン・パネル（浮力調整制御盤）の付近に位置していた第2潜航警報（クラクション）を鳴らし、それにより緊急浮上の開始を告げた。

b. 一人の招待客は浮力調整制御盤部署にいた油圧手と一緒におり、油圧手がこの招待客にその手順を慎重に説明した。招待客も油圧手も両者共にその手を EMBT（緊急浮上主要浮力調整タンク）作動弁の上ののせていた。彼らの手は組み交わらされており、適切な時期に、適切な方法でグリーンヴィルの緊急浮上を開始する為に一緒に作動弁を操作した。

c. 一人の招待客は、操舵員の手が彼の手の上にあてがわれた状態で、操舵装置の前に座っていた。浮上する間、操舵員はこの招待客の背後頭上に立っており、彼らは一緒に舵やくを持ち上げた。（ブランドヒューバー大佐の証言 839-40 頁；プリチェット大尉の証言 1362 頁；MM 長兵曹長ストレイルの証言 1230 頁；MM 機機員 一等兵曹ハリスの証言 1263-65 頁；SK 補給員三等兵曹フィードラーの証言 1280-83 頁；証拠書類 64, 65）

367. 衝突の後、操舵員は直ちに操舵を取り戻した。招待客たちは早急に発令所から乗員食堂に護衛案内された。その後少しして、グリーンヴィルが乗員食堂内に救急救援ステーションを設置し始めるにあたり、彼らは魚雷室に連れて行かれた。魚雷室にいる間には、彼ら自身で出来る可能な範囲で、彼らは乗員達が救助機器の縛り目を引きちぎり、手渡しするのを手伝った。（証拠書類 64, 65）

368. 招待客達は、午後の間中何が起きているかに関しては、状況報告を逐一受けていた。主にブランドヒューバー大佐と艦内マイクを通じてである。（証拠書類 64, 65）

369. 招待客達は後になって魚雷室から前任士官食堂に連れて行かれた。グリーンヴィルの護衛エスコート役が一名常時彼らに付き添って側を離れなかった。（証拠書類 64, 65）

370. 民間人招待客達は2月9日から10日にかけての夜、船が搜索救助任務

主題： 「2001年2月9日にハワイ州オアフ島の沿岸沖で発生した
合衆国船グリーンヴィル(SSN772)及び日本国内燃機関船
えひめ丸間の衝突の周辺状況に対する審問委員会の審理」

を続行していた間、グリーンヴィル上に留まった。(証拠書類 64、65)

371. 2月10日の朝、およそ9時30分頃、グリーンヴィルが港に向けて水上を移動中、招待客達は海軍の水上船に移され、パール・ハーバーの海軍基地に帰港した。(コネツニ少将の証言 749-50 頁; 証拠書類 1、添付書類 24 (航泊日誌); 証拠書類 45, 64)

372. 彼らがグリーンヴィルから離艦する際に、ワドル中佐が招待客達と話しをした。彼らに対し中佐は艦の帰港へのマスコミの関心について話した。彼は、もし質問を受けたなら、真実を語り、装飾をしたり憶測を入れたりせず、彼らが見たこと、そして実際に起きたことを話してくれる事を求めた。(証拠書類 65)

373. 招待客たちは埠頭への到着と共に太平洋潜水艦隊司令官に迎えられた。コネツニ少将と会った時、招待客たちは2点について彼に伝えた。第一点は、彼らは、可能であれば、彼らのプライバシーが保全維持されることを要請した。第二に、グリーンヴィルが実にプロフェッショナルに運営操作されていた旨を太平洋潜水艦隊司令官に印象付けた。彼らとのこの会合の最後に、彼らが将来何らかの情報や援助を必要とするような場合が生じた場合にと、コネツニ少将は招待客に太平洋潜水艦隊の電話番号を渡した。(コネツニ少将の証言 750 頁; 証拠書類 64)

V. 2月9日の合衆国船グリーンヴィルの行動海域の適否

ハワイの行動海域

374. ハワイの行動海域は地理的に基盤の目に区画された格子角から成っており、これはハワイ諸島を取り巻く海上に確立されており、これらは第三艦隊所属艦艇及び潜水艦によって使用される。(グリフィス少将の証言 220 頁; 証拠書類 62, 68)

a. ハワイの行動海域は北緯 25 度から 17 度、西経 162 度から 154 度による領域と定められている。(証拠書類 62, 68)

b. ハワイの行動海域格子システムは、緯度 20 分の高さの、指定文字で名称が付けられた東西線(アルファからヤンキーの A から Y)の列と経度 20 分の幅の、指定数字で名称が付けられている北南線(1-24)から成りたっている。(証拠書類 68)

主題： 「2001年2月9日にハワイ州オアフ島の沿岸沖で発生した
合衆国船グリーンヴィル(SSN772)及び日本国内燃機関船
えひめ丸間の衝突の周辺状況に対する審問委員会の審理」

375. 太平洋潜水艦隊司令官は、彼の CTG (指揮官作業グループ) 14.5 とし
ての役割の中で、ハワイ行動海域で行なわれる全合衆国海軍潜水艦行動の調整役かつ予
定表作成の権限保持者である。(コネツニ少将の証言 727 頁; 証拠書類 68)

a. 太平洋潜水艦司令官のハワイ行動海域区域における海域管理手順は太平洋潜
水艦隊 OPORD の付則 (Appendix) 1 から付加 (Annex) C 中に定められている。(証拠書類
68)

b. ハワイの行動海域における潜水艦行動の為の特定格子枠の割り振りは毎週
CTG 14.5 のハワイ週間作業予定表の中で定められている。(コネツニ少将の証言 727
頁; 証拠書類 1、添付書類 24 (CTF14.5 週間作業予定表); 証拠書類 68)

376. 行動海域中の格子枠の指定は文字と数字の符号によって表現される:

a. 横一列全部が一文字の符号とそれに続く接尾記号 X X X とで表現される。

b. 縦一列全部が接頭記号 X とそれに続く数字、又その後続く接尾記号 X X で
表現される。

c. 各長方形の区域はさらに半分に分割される。例えば、長方形の緯度の中心か
ら北側の部分は N X と表現され、同様に、長方形の緯度の中心から南側は S X と表現さ
れる。

(証拠書類 1、添付書類 24 (CTG 14.4 週間作業予定表); 証拠書類 68)

377. 潜水艦の指定行動海域は格子枠を形成している横列と縦列を特定する事により
表現される。行動海域が格子枠面積の長方形の一セットから成っている場合には、この
行動海域は斜め線で区切りを入れて表現される、それぞれ北東及び南西に向かう格子線
を特定表現している。(証拠書類 68)

378. 潜水している潜水艦は、他の潜水艦から安全に隔離される事を確保する為に彼ら
の指定をうけている行動海域の領海線から海里 1 マイル以内の範囲に留まっていなけ
ればならない。

主題： 「2001年2月9日にハワイ州オアフ島の沿岸沖で発生した
合衆国船グリーンヴィル(SSN772)及び日本国内燃機関船
えひめ丸間の衝突の周辺状況に対する審問委員会の審理」

379. 潜水艦の行動に関する情報は一般市民に対して公表されていない。(グリフィス少将の証言 219 頁)

380. 海軍によるハワイ行動海域の確立は民間人の海上交通に適用されないし、いかなる形でも影響を与えない。(グリフィス少将の証言 219-220 頁)

381. 潜航中の潜水艦に必ず責務が負わされており、潜水艦の方が必ず譲る側の船舶である。さらに、浮上にあたり航行の安全の為に完全かつ完璧な責任を負わされている。(グリフィス少将の証言 219-220 頁；証拠書類 1, 添付書類 24 (常備命令規定) 証拠書類 2)

2月9日の合衆国のグリーンヴィルの行動海域

382. 2月9日のグリーンヴィルの指定行動海域は L13SX/P13XX 及び M15X X/P14XX 0000-2400 と定義されていた。オアフ島の南に位置する、この海区は約 60 海里マイル及び 80 海里マイルの長方形の海域を包囲する。(証拠書類 1 添付書類 24 (CTG 14.5 週間行動予定表)；証拠書類 62, 68)

383. 潜水艦に広い行動海域を指定することは通常行なわれている慣習で、これにより、ハワイの行動海域で行動しているかも知れない他の潜水艦からの適切な隔離が確保出来るのである。(グリフィス少将の証言 219 頁)

384. 2月9日は短時間航海期間の故の時間的と距離的必要性により、グリーンヴィルは同艦が当日指定されていた行動海域のうちの北部位に留まっていた。グリーンヴィルは行動海域の領域の少なくとも一マイル以内に常時留まった。(グリフィス少将の証言 222 頁；電子員トーマス一等兵曹の証言 1067 頁；電子員三等兵曹ブランディングの証言 1090 頁；証拠書類 1, 添付書類 24 (航海位置日誌)；証拠書類 62)

385. グリーンヴィルの2月9日の行動海域は、パール・ハーバーに十分近くて、潜水艦の航行を可能にし、招待者体験航海を行ない、かつ7時間以内にパール・ハーバーに帰港出来るという意味で論理的な指定であった。(グリフィス少将の証言 222-24 頁；証拠書類 62)

386. グリーンヴィルが2月9日に指定された行動海域は深海も有り、定期航路からも逸れており、かつ、一般的に障害物により妨げを受けない所であった。(グリフィス少将の証言 224 頁；コネツニ少将の証言 787 頁)

主題： 「2001年2月9日にハワイ州オアフ島の沿岸沖で発生した
合衆国船グリーンヴィル(SSN772)及び日本国内燃機関船
えひめ丸間の衝突の周辺状況に対する審問委員会の審理」

387. グリーンヴィルが2月9日に指定された行動海域は十分な広さと十分な深さを持ち、緊急浮上航行を含む体験航海の支援として典型的に行なわれるタイプの船の示威行為を容易にすることが出来る海域であった。(グリフィス少将の証言 224頁; コネツニ少将の証言 787頁; 証拠書類 62)

海上交通

388. ハワイ諸島を取り巻く海上には交通分離システムは設置されていない。
(コネツニ少将の証言 725頁)

389. 海軍はハワイの行動海域における船舶の交通密度を再検討する非公式調査を1963年、1970年、及び1997年に行なった。(コネツニ少将の証言 726頁)

390. 2月9日にグリーンヴィルに指定された行動海域を横断する主要定期船の航路はない。(コネツニ少将の証言 726-27頁; グリフィス少将の証言 221頁; 証拠書類 62)

391. 南オアフの辺りにある主要商業船舶定期航路は東西方向に走っており、かつ一般的には、2月9日にグリーンヴィルに指定された行動海域よりは北側にある。極東との商業に従事する船舶はホノルル港から北側の方に位置しているカウアイ水路を使用する。合衆国本土との交易に従事する船舶はホノルル港の東に位置するカイヴィ水路を利用する。(コネツニ少将の証言 726, 787頁; グリフィス少将の証言 221頁; 証拠書類 62)

392. 諸島間の商業に従事している小型汽船の交通は一般的に、グリーンヴィルが2月9日に指定を受けた行動海域の北側にあたる、オアフ島の沿岸線に添った辺りから逸れない。(コネツニ少将の証言 726, 787頁)

393. 漁船及び娯楽用小船舶は、ハワイの行動海域の全般に渡って散在している魚群集め装置のある近辺を航行し、漁をすることが知られている。こうした船舶がある特定の時間帯に行動海域の何処にいるかを予測する事は不可能である。(グリフィス少将の証言 222-23頁; 証拠書類 62)

主題： 「2001年2月9日にハワイ州オアフ島の沿岸沖で発生した
合衆国船グリーンヴィル(SSN772)及び日本国内燃機関船
えひめ丸間の衝突の周辺状況に対する審問委員会の審理」

394. 一般的に、船舶は2月9日にグリーンヴィルに指定されていた行動海域を北南の方角に突っ切って移動をすることはなかった。グリフィス少将の証言 221頁)

395. 太平洋潜水艦隊司令官の責任範囲内にある他の行動海域と比較して、(例えばカリフォルニアの行動海域、ピュージット・サウンドの行動海域)ハワイ諸島の周辺の海上は交通密度が低い。(コネツニ少将の証言 728, 787頁)

潜水艦実験及び公試区域

396. 民間人に使用されている、現在の国家大洋及び大気行政局(NOAA)の海図(特定的に19340番海図)は、オアフ島の南を「潜水艦実験及び公試区域」と記している。(証拠書類1, 添付書類29; 証拠書類17)

397. この区域は海軍の要請により1960年代に設定されたものである。(コネツニ少将の証言 729-30頁)

398. この区域は、ハワイ行動海域システムのもとではもはや何等の特別な意味も関連性も持たない、軍で使用されている国家映像及び地図作成局(NIMA)の海図からは既に除去されている。(コネツニ少将の証言 729-30頁; グリフィス少将の証言 225頁)

太平洋潜水艦隊幕僚長の役割

399. 太平洋潜水艦隊幕僚長、ロバート・L・ブランドヒューバー大佐は2月9日グリーンヴィルに搭乗して体験航海に出航した。(ブランドヒューバー大佐の証言 820頁)

400. 2月1日から11日までの期間、コネツニ少将が日本国への(TAD)臨時的追加任務を帯びた為に、ブランドヒューバー大佐は太平洋潜水艦隊司令官代行として正式に任命されていた。(証拠書類46)

401. ブランドヒューバー大佐がグリーンヴィルでの体験航海を行なう予定であった7時間の間、訓練主任幕僚のカイル大佐(太平洋潜水艦隊 N7)が太平洋潜水艦隊司令官代行の任に就いた。

主題： 「2001年2月9日にハワイ州オアフ島の沿岸沖で発生した
合衆国船グリーンヴィル(SSN772)及び日本国内燃機関船
えひめ丸間の衝突の周辺状況に対する審問委員会の審理」

a. ブランドヒューバー大佐がグリーンヴィルにて体験航海していた際には、彼は太平洋潜水艦隊司令官代行として機能することは出来なかった。コネツニ少将にしても、彼が外部との連絡を断たれるその期間中に、ブランドヒューバー大佐が太平洋潜水艦隊司令官代行として任に就くことは意図していた事ではなかった。

b. 太平洋潜水艦隊司令官代行として、カイル大佐の責任は、ブランドヒューバー大佐の留守の間、太平洋潜水艦隊司令官の注目が必要なレベルの事柄の一切全てを調整し、かつそれに対応することであった。

c. カイル大佐を正式に太平洋潜水艦隊司令官代行として指名するものは何も存在していなかった。カイル大佐は口頭による任務割り当てによりその責務に就いた。(脚注*9)

d. ブランドヒューバー大佐とカイル大佐の間には何らの正式な引き継ぎも説明行なわれなかった。

(コネツニ少将の証言 741-46 頁; ブランドヒューバー大佐の証言 824-25 頁; カイル大佐の証言 620-23 頁)

402. ブランドヒューバー大佐が語った2月9日のグリーンヴィル乗船体験航海への目的は四つあった:

a. 民間人招待客の為のエスコートとして隊の指揮官を代表する事。ブランドヒューバー大佐は、この民間人招待客達が元太平洋軍司令官に推薦されて体験航海に来るということから、これが特に重要なことであると考えた;

b. グリーンヴィルの作業ぶりを評価する事;

c. 彼の義理の息子である、グリーンヴィルの機関長メドー少佐の実務環境でのプロフェッショナルな働きぶりを観察する事。原子力推進力審査委員会への転任を前にしたメドー大佐にとって、これがグリーンヴィルでの最後の航海であった;

(脚注9)

カイル大佐は、自分自身は太平洋潜水艦隊司令官代行で無く、幕僚長代行の役割にあったと考えていたと証言を行なったが、当委員会では太平洋潜水艦隊司令官、コネツニ少将の方が彼の役割についてより重要で、かつ説得力のある解釈を提供したと感じている。コネツニ少将の証言 741-46 参照。

主題： 「2001年2月9日にハワイ州オアフ島の沿岸沖で発生した
合衆国船グリーンヴィル(SSN772)及び日本国内燃機関船
えひめ丸間の衝突の周辺状況に対する審問委員会の審理」

d. 潜水艦乗艦手当ての目的の為、航海時間の蓄積を行なう事。

(ブランドヒューバー大佐の証言 820-21 頁)

403. 2月9日の朝グリーンヴィルに乗り込む前に、ブランドヒューバー大佐はグリーンヴィルのORSE訓練の為の行動航海期間の開始が2月12日に変更されていた事は知らなかった。又、その日の航海の主な目的が招待客体験航海を支援する為のものであったことも大佐は知らなかった。(ブランドヒューバー大佐の証言 819 頁; ワーナー少佐の証言 1511 頁)

ブランドヒューバー大佐の役割：彼の観点

404. グリーンヴィルに乗艦した時、ブランドヒューバー大佐は自分の主要かつ第一の役割は民間人招待客の為の海軍先任将校として、エスコートとして任務することと考えていた。(ブランドヒューバー大佐の証言 822, 882-83 頁)

ブランドヒューバー大佐の役割：彼の常備命令規定

405. 2000年9月にブランドヒューバー大佐は太平洋潜水艦隊司令官幕僚長の方針覚え書き 00-1、「体験航海中の常備命令規定及び方針」を発行した。(証拠書類 16)

406. 彼のこの方針覚え書きの規定条件により、ブランドヒューバー大佐は下記の情報及び報告書が太平洋潜水艦隊の船で体験航海に出る際には必須なものとしていた：

a. 体験航海期間中に行なわれる船の操行の為の作業及びスケジュールについての説明。その中には、指定行動海域、予備安全措施及び行動上の束縛事情、相互干渉考察、航海航跡及び計画、予定教練・練習・訓練展開(内部教練を含む)、さらに魚雷の発射演習の為の安全説明も含める事；

主題： 「2001年2月9日にハワイ州オアフ島の沿岸沖で発生した
合衆国船グリーンヴィル(SSN772)及び日本国内燃機関船
えひめ丸間の衝突の周辺状況に対する審問委員会の審理」

b. 船の制御、航海及び準備性に関連する船の状況への重要な変更に関する報告書.

c. 船の士官達及び先任下士官達との会合機会

d. 先任海曹及び機関部門マスター・チーフに伴なわれて、航海中に区域を検分する機会.

ブランドヒューバー大佐の方針覚え書きには、艦長の通常のやり方に干渉するのは自分の意図する所では無いと書かれている。(証拠書類 16)

407. この方針覚え書きを作成するにあたり、ブランドヒューバー大佐は潜水艦小艦隊の代将としての以前の経験からその推敲を行なったものであった。ブランドヒューバー大佐の意図はこうした指導要綱が重要な時あるいは目的の航海の間、例えば、検分、評価、あるいは認可などの場合に適用できるであろうというものであった。彼はこのような状況下における彼の役割について潜水艦の艦長と正式な理解を持つことが役に立つ事であると信じていた。ブランドヒューバー大佐はこの方針覚え書きを短時間の招待者体験航海に応用する事に関しては特に考えたり、意図したりしていなかった。(ブランドヒューバー大佐の証言 823, 851, 883 頁)

ブランドヒューバー大佐の役割：海軍規定に照らして

408. 海軍規定に照らしてみれば、ブランドヒューバー大佐は2月9日にグリーンヴィルの乗客として航海したことになる。

a. 海軍規定第 1031 条、「乗客として航海する士官の権限」は関連部分を抜き書くと、以下とある：

船あるいは船舶、旗艦は含まない、の艦長は、海上での指揮に適任した将官が乗客として航海している場合には、そうした将官からの命令に従わなければならない。その他の乗客として航海している艦長より先任の士官については、艦長に対する権限は一切無い。

主題： 「2001年2月9日にハワイ州オアフ島の沿岸沖で発生した
合衆国船グリーンヴィル(SSN772)及び日本国内燃機関船
えひめ丸間の衝突の周辺状況に対する審問委員会の審理」

b. この条項の第2文から、将校でないので、ブランドヒューバー大佐は2月9日の航海の間グリーンヴィルの艦長に対する権限は一切持っていなかった。

(証拠書類 61 (強調追加))

409. グリーンヴィルに乗船中、ブランドヒューバー大佐は「出席している前任士官」ではなく、「出席している船艦上の前任士官」でも無かった。

a. 「出席している前任士官」は現役任務についている海軍の前任線上にいる士官で、海上にあって指揮を取る資格を有する者であり、その地方において海軍省のいずれかの部署の指揮にあたっているもので、出席している者の事をいう。

b. 「船艦上にある出席している前任士官」とは、海軍の前任士官であり、海上にあって指揮を取る資格を有する者であり、その地方において海軍の行動部隊の個隊もしくは部隊の指揮官をその第一職務としており、出席している者の事をいう。

c. ブランドヒューバー大佐は海上にあって指揮を取る資格を有する。

d. ブランドヒューバー大佐はグリーンヴィル上に出席している海軍の前任士官であった。

e. 2月9日当日、グリーンヴィルに乗船している際、ブランドヒューバー大佐は太平洋潜水艦隊司令官代行ではなく、よって指揮権を有してはいなかった。その立場上の権限は、実際の所、カイル大佐に委ねられていた。

(証拠書類 46; 証拠書類 61, 0901, 0902, 0928 条)

410. 海軍規定のもとでは、上記のどの条項もグリーンヴィルの艦長を彼自身の責任から解放するものは無い。

a. 艦長の彼あるいは彼女の指揮に対する責任は絶対のものである。例外は、彼あるいは彼女が資格ある権限者によってその責任から解放された時、及び彼あるいは彼女が資格ある権限者によってその責任から解放された範囲のものに限られる。艦長の権限は彼あるいは彼女の責任と比例し、釣り合うものである。(証拠書類 61, 0802 条)

主題： 「2001年2月9日にハワイ州オアフ島の沿岸沖で発生した
合衆国船グリーンヴィル(SSN772)及び日本国内燃機関船
えひめ丸間の衝突の周辺状況に対する審問委員会の審理」

b. 艦長は自分の船の安全航海への責任を有する。(証拠書類 61, 0957 条)

ブランドヒューバー大佐のグリーンヴィル上での行動

411. 2月9日の彼の行動によって、ブランドヒューバー大佐は自分が自分の方針覚え書き中で求めているような説明も報告も期待していない旨をグリーンヴィルに対して非公式に表明した。

a. ブランドヒューバー大佐は2月9日の朝 S21B 埠頭に到着すると同時に、グリーンヴィルの艦長、副長及び先任海曹に出迎えられて、彼らから乗艦歓迎のパッケージを受け取った。中には民間人招待客の名前リスト、グリーンヴィルの士官達の名前リスト、及び先任下士官達の名前リストが入っていた。(ブランドヒューバー大佐の証言 902 頁; ワドル中佐の証言 1695-97 頁; MM 兵曹長コフマンの証言 1331-32 頁; 証拠書類 75, 77)

b. 埠頭にいる間にブランドヒューバー大佐は艦長の報告の申し出を断わった。大佐は又、外港に向けての海上移動の為船橋で艦長の同席をとという申し出も断わった。ブランドヒューバー大佐は艦長に自分が調査官としてではなく、一人の訪問者として来ており、自分で船内を適宜歩き回り、自身で観察をする旨を伝えた。(ワドル中佐の証言 1696 頁)

c. 衝突の前には、ブランドヒューバー大佐は艦長を呼び、自分の方針覚え書きの中に概論している情報、説明あるいは報告書を求める行為は何一つしなかった。(ブランドヒューバー大佐の証言 822-23, 846 頁)

d. ブランドヒューバー大佐は先任海曹及び機関部門マスター・チーフによる各部署への案内申し出を断わり、自分自身で歩き回る事を選んだ。(ブランドヒューバー大佐の証言 823, 903-04 頁)

412. ブランドヒューバー大佐は朝は艦内を巡り、個々の士官や乗員と会合したり話したりし、民間人とやりとりをして時間を過ごした。彼は部分検分を行なう為にソーナ一室を巡回した。(ブランドヒューバー大佐の証言 831, 847, 874, 893, 903 頁; スローン大尉の証言 982-83 頁; MM 兵曹長コフマンの証言 1332-33 頁)

主題： 「2001年2月9日にハワイ州オアフ島の沿岸沖で発生した
合衆国船グリーンヴィル(SSN772)及び日本国内燃機関船
えひめ丸間の衝突の周辺状況に対する審問委員会の審理」

413. ブランドヒューバー大佐が当日計画予定表を一見することにより、船のスケジュールがどのようなものなのかを理解したのは出航後でしかなかった。彼は提案されているスケジュールが典型的な招待客体験航海として合理的なものであると感じた。(ブランドヒューバー大佐の証言 827 頁)

414. ブランドヒューバー大佐はアナログ式信号映像表示モニター(AVSDU)の具体的な状態については一切知らされていなかった。彼は出航後、発令所の検閲をしていた際の自分の観察から AVSDU 表示モニターが使用不可能であると知った。ブランドヒューバー大佐はこのモニターの状況についての質問は一度もしていないし、又グリーンヴィルのそれを補う為の代替案についても質問は一度も行っていない。(ブランドヒューバー大佐の証言 831-32, 852 頁)

415. ブランドヒューバー大佐は乗員食堂で、最初の民間人招待客グループと艦長と共に昼食を取った。(ブランドヒューバー大佐の証言 836 頁)

416. 昼食中、ブランドヒューバー大佐はグリーンヴィルが試験深度にいる事を知った。彼はこの事実に驚いた。民間人招待客の手前であったので、大佐はその時にはその話を艦長に持ち出さない事にした。(ブランドヒューバー大佐の証言 836, 848 頁)

417. ブランドヒューバー大佐は午後の上下操航と高速操航行動を観察する為に、招待客と共に発令所に向かった。(ブランドヒューバー大佐の証言 826-27 頁)

418. ブランドヒューバー大佐はグリーンヴィルの上下、高速航行披露の間、特別の注意を払ってそれを観察した。彼の経験から、これらが潜水艦にとって時に困難を伴う航行であったからである。大佐は、船の管制担当組の後ろ、発令所の前方左側の所を自分の居場所とした。これらの航行を終えた時の大佐の評価は、グリーンヴィルがこれらの操行行動を上手に披露したというものであった。(ブランドヒューバー大佐の証言 826-29, 833, 860 頁)

419. 上下、及び高速航行のあと、グリーンヴィルの披露結果に気を良くした思いと共に、大佐は発令所の後部に移動した。大佐は艦の潜望鏡深度への浮上に対しては、それほど注視が必要であるとは感じなかった。グリーンヴィルの艦長は、これまでにこの艦でこの操行を何度も行っていたからであった。

主題： 「2001年2月9日にハワイ州オアフ島の沿岸沖で発生した
合衆国船グリーンヴィル(SSN772)及び日本国内燃機関船
えひめ丸間の衝突の周辺状況に対する審問委員会の審理」

大佐は海図を見てグリーンヴィルが行動海域の中のどのあたりにいるかを調べた。(ブランドヒューバー大佐の証言 826, 830-31, 893 頁)

420. ブランドヒューバー大佐は哨戒長が潜望鏡深度のブリーフィングを行なうのは聞かなかったし、又哨戒長が艦長に潜望鏡深度に進行しても良いかの許可を求めたのも聞いていない。大佐は、ソーナーあるいは火器管制当直からの探知情報報告については何一つ聞いていなかったし、それらに対する注目もしていなかった。(ブランドヒューバー大佐の証言 835, 861, 870 頁)

421. ブランドヒューバー大佐は海上の探知目標状況については認識をしていなかった。彼はグリーンヴィルが潜望鏡深度に至るより以前に2航区分の海上目標運動解析行なったと信じている。(ブランドヒューバー大佐の証言 835, 864, 893 頁)

422. ブランドヒューバー大佐は哨戒長の第一回目の潜望鏡探索を観察した。適切な手順によりそれは完了されたように見えた。(ブランドヒューバー大佐の証言 833, 866-68 頁)

423. ブランドヒューバー大佐は、艦長が潜望鏡を取り、彼の目視による探索を行なっているのを観察した。艦長が船を浮上させるように命令した。大佐は艦長が潜水艦の後部左舷の方向、真横から真後ろまで、を随分長く探索していた事実に驚いた。大佐にはペリヴィスの表示は見えなかった。(ブランドヒューバー大佐の証言 833-34, 868-69 頁)

424. ブランドヒューバー大佐は最初艦長の緊急潜航の命令を聞いて驚いたがその状況も、それが訓練の為であると艦長から聞いて納得した。艦長は自分が緊急潜航を行なう命令を出すといことについて大佐には前もって知らせていなかった。(ブランドヒューバー大佐の証言 834, 849-50, 870 頁)

425. この緊急潜航の間に、艦長は船を左に向けるように命令した。大佐はこれで、潜望鏡探索の間、艦長は自分が船を浮上させようと意図していた海域に集中していたことを理解した。(ブランドヒューバー大佐の証言 834, 875-76 頁)

426. ブランドヒューバー大佐は緊急潜航から緊急浮上を命令するまでの時間は適切なものであると思った。(ブランドヒューバー大佐の証言 876 頁)

主題： 「2001年2月9日にハワイ州オアフ島の沿岸沖で発生した
合衆国船グリーンヴィル(SSN772)及び日本国内燃機関船
えひめ丸間の衝突の周辺状況に対する審問委員会の審理」

427. グリーンヴィルが潜望鏡深度浮上の準備をしているあたりから、ブランドヒューバー大佐は操行が「自分がやるよりは早い」速度で進行してはいるが、それでも非合理的な程度のもので無いと感じていた。(ブランドヒューバー大佐の証言 832-33, 872-73, 875 頁)

428. ブランドヒューバー大佐は、艦長が自己の船の能力範囲を知っており、積極的な披歴を行っており、しかも、艦長がプロとして適切であると考えられる方法で、しかも自分の能力の範囲の中でグリーンヴィルを操艦していることを信じていた。(ブランドヒューバー大佐の証言 844 頁)

429. ブランドヒューバー大佐は自分が不意に自分の意見を差し挟む必要性は全く感じていなかった。まして、乗組員や民間人招待客の前では。(ブランドヒューバー大佐の証言 833, 643, 890, 909-10 頁)

430. ブランドヒューバー大佐は艦長に対して一度も行動のペースに対しての如何なる懸念も表明はしなかった。大佐は彼の観察に関して、そして懸念に関して航海後の反省ブリーフィングの際に艦長と話そうと決めていた。(ブランドヒューバー大佐の証言 873, 910 頁)

衝突の後

431. ブランドヒューバー大佐は衝突の際発令所にいた。(ブランドヒューバー大佐の証言 876 頁)

432. ブランドヒューバー大佐は艦長の直ぐ後に第2潜望鏡を見た彼が見たものは最初はそれは鯨見物の船かと思えた。彼は艦長と即座に搜索救助手続きを行なうことの必要性を話し合った。(ブランドヒューバー大佐の証言 876 頁)

433. ブランドヒューバー大佐は搜索救助努力支援に直接関与した。通信を監督したり、最初の報告を発する指示をしたりして。大佐は、グリーンヴィル艦上の状況及び陸上での状況の両方について太平洋潜水艦隊作戦司令室と直接会話を行なった。(ブランドヒューバー大佐の証言 877 頁; スミスの証言 1291-92 頁; 証拠書類 45)

主題： 「2001年2月9日にハワイ州オアフ島の沿岸沖で発生した
合衆国船グリーンヴィル(SSN772)及び日本国内燃機関船
えひめ丸間の衝突の周辺状況に対する審問委員会の審理」

434. ブランドヒューバー大佐は適宜の時間をおいて何度も艦長及び他の当直者達の精神状態の査定をする意識的な努力を行なった。大佐はワドル中佐を解任して自分で指揮を取る必要性があるとは一度も感じなかった。(ブランドヒューバー大佐の証言 900頁; 証拠書類1, 添付書類19)

435. ブランドヒューバー大佐は民間人招待客の世話をする役目は自分の仕事であると考えた。大佐は折々彼らに最新状況を伝え、グリーンヴィルを何時港に戻すかを定めるにあたってその推薦・決定を行なう為に、彼らの精神的かつ肉体的な状態の査定を行なった。(ブランドヒューバー大佐の証言 877; 証拠書類1, 添付書類19; 証拠書類45, 64, 65)

436. 2月10日にパール・ハーバー海軍基地に戻ると、ブランドヒューバー大佐は太平洋潜水艦隊司令官に対面し、事後報告説明を行なった。(コネツニ少将の証言 749-51頁)

主題： [2001年2月9日にハワイ州オアフ島の沿岸沖で発生した合衆国船
グリーンヴィル（SSN772）と日本国内燃機関船えひめ丸間
の衝突の周辺状況に対する査問委員会による審理]

意見書

1. 衝突

1. 衝突に至るまでのグリーンヴィルとえひめ丸の航跡を描いた4つの再構築図は本質的な意味で事実上同一であり、2月9日の12時30分から13時43分の衝突までの2隻の船の航跡を正確に反映している。(FF 15, 43).
2. えひめ丸の船長及び乗員の側には衝突の原因になるような落ち度も怠慢もなかった。(FF 4, 13, 14, 379-381).
3. えひめ丸上の器機や装置の故障等で衝突に寄与したものは何もない。(FF 6, 7, 13, 14).
4. グリーンヴィル上の器機や装置等で直接衝突に寄与したものは何もない。(FF 45, 69, 223).
5. 緊急浮上展開に参加した3名の民間人招待客はグリーンヴィルの当直員達によって常時適切に監督、補佐されており衝突を引き起こしてはいない。(FF 220, 65, 366).
6. グリーンヴィルの船上における個別の過失の連続、組み合わせの結果が潜水艦とえひめ丸の衝突を生起させたものである。(FF 45, 50, 63, 65-67, 76, 77, 87-89, 92-94, 132, 138, 141-144, 149, 150, 152, 157-160, 162-164, 166, 171, 172, 176, 194, 199, 202, 203, 206, 208, 217).
7. 衝突はグリーンヴィルに乗船していた者の故意あるいは計画的な違反行為によって引き起こされたものではない。(FF 45, 50, 63, 65-67, 76, 77, 87-89, 92-94, 132, 138, 141-144, 149, 150, 152, 157-160, 162-164, 166, 171, 172, 176, 194, 199, 202, 203, 206, 208, 217).
8. グリーンヴィルの当日の日日計画書には無理のない招待客体験航海の示威行為日程が組み込まれていたが、実施にあたっては、それが守られなかった。民間人招待客との昼食会が長引いてしまった後は、船は失われた時を埋め合わせる為にスケジュールの調整を試みたが成功しなかった。(FF 37, 40, 47, 55-57, 78-85, 350-360).

主題： [2001年2月9日にハワイ州オアフ島の沿岸沖で発生した合衆国船
グリーンヴィル（SSN772）と日本国内燃機関船えひめ丸間
の衝突の周辺状況に対する査問委員会による審理]

9. 衝突の主要原因は、招待客体験航海プログラムの午後の行事を全て完了させ、予定通りのスケジュールに出来るだけ近い時間に、パールハーバーに帰港しようとする為に発令所内で艦長によって創造された人工的な緊急感であった。(FF 78-85, 89, 92, 101, 103, 110, 132, 136, 138, 144, 145, 157-160, 162-166, 176, 194, 196, 197, 199, 202-206, 208).

10. 衝突の主要原因は、艦長が標準潜水艦行動手順及び彼自身の常備命令規定を無視したことにあった。(FF 125, 129, 132, 138, 140-142, 145, 150, 157, 158, 161-163, 166, 171, 172, 179-182, 194, 196, 197, 199, 202-204, 208).

11. 衝突の主要因は船の、探知目標管理チームが共に作業を行い、お互いに水上目標状況情報を分け合うことを怠ったことにある。(FF 45, 49, 50, 63-67, 72, 74, 76, 77, 92-94, 101, 110, 129, 132, 138, 140-145, 149, 150, 157-160, 162-164, 166, 171, 172, 176, 194, 199, 202, 203, 206, 208, 217).

12. 三つの水上目標の管理はグリーンヴィルの能力範囲をはるかに下まわる程度のものであったが、2月9日の発令所内での人口的に作られた緊急感が目標処理チームに、目標番号 S-13 が近付いていることを明確に知らせる重要な探知情報の認識を見逃させ、或いは誤認させる結果を引き起こした。(FF 45, 49, 50, 63-67, 72, 74, 76, 77, 92-94, 101, 110, 129, 132, 138, 140-145, 149, 150, 157-160, 162-164, 166, 171, 172, 176, 194, 199, 202, 203, 206, 208, 217).

13. 艦長は解析が完了するより以前にこの冷却水の標本の採集の確保をする様に命令した。これは彼が船が予定スケジュールより遅れていることを知っており、午後の航行を早急に開始することを希望していたからである。(FF 78-84).

14. 艦長によって創造された人口的な緊急感が彼に海軍戦闘準則の指導及び自らの常備命令規定から逸脱させたもので、それは目標運動解析の実地、潜望鏡深度への浮上及び彼の潜望鏡深度における目視捜査行為の中に見られる。(FF 125, 129, 132, 138, 140-142, 145, 150, 157, 158, 161-163, 166, 171, 172, 179-182, 194, 196, 197, 199, 202-204, 208).

15. 哨戒長に対する艦長の「5分で潜望鏡深度への浮上準備をし、かつ潜望鏡深度に到達せよ。」という指示は非合理的であるとともに、グリーンヴィルが当日午後の船の航行を継続する間中時間が一つの重要な要素であったということを示唆していた。(FF 132).

主題： [2001年2月9日にハワイ州オアフ島の沿岸沖で発生した合衆国船
グリーンヴィル（SSN772）と日本国内燃機関船えひめ丸間
の衝突の周辺状況に対する査問委員会による審理]

16. 艦長が哨戒長に対して5分間で潜望鏡深度に着くよう指示したところに、何らの戦術上の理由はなかった。2月9日に潜望鏡深度に至ろうとした唯一の理由は緊急浮上の準備をする船の安全性を確認するためであった。(FF 37, 182).
17. グリーンヴィルの高速航行は運動中のソーナー探知、表示能力にマイナスの影響を与えた。その後もしばらくはその影響が続いた。こうした情報は目標処理の基礎情報としては信頼性が低いものとなってしまう。(FF 115, 116, 123-125, 128, 129, 140-143).
18. グリーンヴィルが340度の針路にとどまり一定深度で約10ノットの一定速度を約3分間保ち、適切な目標運動解析を実地することが出来なかった為に、ソーナーは毎分右へ6度の方位変化率が存在していた事を識別することが出来なかった。(FF 129, 140-143).
19. 仮にグリーンヴィルが針路340度に約3分定針していたならば、ソーナーでは、毎分右6度の方位変化が毎分11度に増加する高い右への方位変化が起こっていたことを認識していたことであろう。(FF 143).
20. 海軍戦闘準則(NWP) 3-21.51.1及びグリーンヴィルの艦長常備命令規定6の中で定められているとおりに、船が約3分間針路340度を保っていたならば、ソーナーはS-13が近距離目標であることを認識していたはずである。(FF 121, 123-125, 129, 140-143).
21. 潜望鏡深度で使われた時間は通常の船の機能を達成するには不十分なものであった。哨戒長付は潜望鏡深度における望ましい艦首角をつけるために釣り合い調整を適切に実地するための十分な時間を与えられなかった。航海員はGPSの固定を得られなかったし、電子戦支援装置の操作員も電子探知目標の解析と区分けの作業を完了できなかった。(FF 179-181, 194, 196, 197, 202-206).
22. 予定が遅れていたこと、及び目標は全て遠距離であるとの推測から、艦長は哨戒長が実施している潜望鏡搜索を阻止し、操作基準から逸脱し、簡略化した目視捜査を実施することになり、これらが自艦及び水上船舶の安全の確保を妨げることとなった。(FF 86-89, 92, 136, 144, 145, 157, 164, 194, 196, 197, 199, 202-206, 208).

主題: [2001年2月9日にハワイ州オアフ島の沿岸沖で発生した合衆国船
グリーンヴィル (SSN772) と日本国内燃機関船えひめ丸間
の衝突の周辺状況に対する査問委員会による審理]

23. 艦長が実施した、深度 58 フィートで 16 秒間の水上確認は、高さも時間も 2 月 9 日の海面状況及び招待者体験航海の使命の点から判断しても不十分なものであった。(FF 37, 182, 188, 198, 202, 208).

24. 艦長が海軍戦闘準則 3-13.10 の指導に従い、又彼自身の常備命令規定 6 に基き適切な捜査を実施していたならば、艦長はえひめ丸を探知していたはずなのである。(FF 179-182, 194, 196, 197, 199, 202, 203, 208).

25. NWP 海軍戦闘準則 3-13.10 とグリーンヴィル艦長常備命令規定 6 では、乗員、民間人招待者及び水上船舶等の安全確保のために、慎重なシーマンシップと運航上の危機管理能力を戦術的な潜望鏡探索よりも卓越させている。(FF 37, 182).

26. 2 月 9 日の天候、視程並びに海面状況、及び安全性への必要度から、艦長は浅深度に浮上するか、可能な限り視点を高くする用に船を上げる等の配慮をするべきであった。(FF 37, 182, 188, 198, 208).

27. 航海長が哨戒長及び・あるいは艦長に対し、もやがかかっていた状況である事とその日の早朝には白っぽい色をした目標を拾うのに苦労したことを伝えてさえいれば、哨戒長と艦長は衝突前により注意深く慎重な潜望鏡捜索を実施していたかも知れず、えひめ丸を発見していたかも知れない。(FF 49, 50, 63, 198).

28. 気象、視程、海面状況及びえひめ丸の白い船体と上部構造物が、グリーンヴィルの潜望鏡をとうしてのえひめ丸の発見を困難にした。(FF 7, 48-50, 188, 198, 208).

29. グリーンヴィル艦内の指揮の雰囲気と民間人招待者が搭乗していることが、当直員の業務遂に影響を与え、よって間接的には有るが衝突に寄与した。(FF16, 17, 57, 58, 77, 82, 85, 95, 101, 102, 110, 111, 132, 150, 151, 157, 160, 162-164, 166, 177, 194, 199, 202, 203, 216, 217, 220, 224, 363, 364, 366, 416, 419, 430).

主題： [2001年2月9日にハワイ州オアフ島の沿岸沖で発生した合衆国船
グリーンヴィル（SSN772）と日本国内燃機関船えひめ丸間
の衝突の周辺状況に対する査問委員会による審理]

30. 2月29日当日、グリーンヴィルの乗員は、苛烈な訓練と検分を経験しておらず、又行動経験の蓄積が欠如していた。(FF 21-23, 26-29, 31-34, 37, 41).

31. 乗員は彼らのプロとしての技量に間違った安心感と自信を抱いていた。彼らは自分達が実際より優秀であると過信しており、自らを厳格に評価することができなくなっていた。(FF 16, 18, 19, 21, 23, 27-29, 32, 33, 41, 63, 64, 66, 67, 72, 76, 77, 89, 92-94, 132, 138, 140-144, 150-152, 157-160, 162-164, 166, 176, 194, 202, 203, 208, 215-217)

32. 乗員は艦長が困難な行動環境では自ら船の行動と運動の指揮を取ってくれることに慣れていた。乗員は今まで自分達を成功に導いてきた艦長の判断を信じていた。2月9日の乗員の力強い支援が必要とされていたにもかかわらず、提供されなかったのは、乗組員の中にこの要因があったからである。(FF 16, 19, 20, 101, 110).

33. 2月9日当日、乗組員は満足げであった。彼らのごく最近、1ヶ月の洋上訓練から帰島したばかりであった。彼らは7時間の招待客体験航海終了後の週末休日を楽しみにしていた。あらかじめ計画された当直表と言うものはなく当直そのものは午後3時に帰港するという想定に基づいたその場しのぎ的なものであった。予定は実行にされず、標準手順は無視された。(FF 27, 30-34, 36, 37, 40, 41, 45, 49, 50, 57, 58, 60, 61, 64, 66, 67, 125, 129, 132, 138, 140-142, 145, 150, 157, 158, 161-163, 166, 171, 172, 179-182, 194, 196, 197, 199, 202-204, 208).

34. 民間人招待者は、グリーンヴィルに乗艦中、常時適切な立ち居振る舞いをしていた。(FF 365).

35. グリーンヴィル上の民間人招待者の存在は、衝突事故に直接的には寄与しなかったものの、発令所内の各種主要当直員の勤務状態に少なからず悪影響を与えた。(FF 16, 57, 58, 77, 82, 85, 95, 101, 102, 110, 111, 132, 150, 151, 157-160, 162-164, 166, 176, 177, 194, 199, 202, 203, 216, 217, 220, 224, 363, 364, 366, 416, 429, 430).

36. 発令所内の多数の民間人招待者は当直員と発令所内の当直員示装置表示との間の物理的な妨げになっており、グリーンヴィルの探知目標情報処理を担当している当直員同士における通常の探知情報の流れを阻害していた。(FF 95, 177, 363, 364).

主題： [2001年2月9日にハワイ州オアフ島の沿岸沖で発生した合衆国船
グリーンヴィル（SSN772）と日本国内燃機関船えひめ丸間
の衝突の周辺状況に対する査問委員会による審理]

37. 発令所内の民間人招待客の位置と数は、重要な探知情報を哨戒長及び艦長に伝える火器管制当直員の能力に干渉した。（FF 77, 95, 177, 363, 364）。

38. 艦長、哨戒長及び探知情報処担当者は発令所内の民間人之間を回って強力に相互連絡をとりあったり、緊密な連携等をとることを怠った。（FF 16, 57, 58, 77, 82, 85, 95, 101, 102, 110, 111, 132, 150, 151, 157-160, 162-164, 166, 176, 177, 194, 199, 202, 203, 216, 217, 220, 224, 363, 364, 366, 416, 429, 430）。

39. 艦長は、グリーンヴィルの航行能力の安全な展示よりも民間招待客達の接遇を優先するという極めて不適切な処置をとった。例としては次のことが列挙される。

a. 記念品としての浸深度における海水資料を採取するための試験深度へ潜航及び最大速力での潜航は艦長の許されていなかった行為で、これらは民間人招待者に対して不必要に極秘情報を露呈させることになった。

b. 記念品を取得するために装具の装備を変更したのは、自艦の安全よりも接客を重んじた不適切な好意であった。

c. 民間人招待者に対して鯨の鳴き声を再生するためソーナー録音装置の使用を許可したことは、重要な装置の第一線での使用からはずしたことになる。

d. 昼食後に民間人招待者のために、サインをした行為は艦の午後の展開を遅延させることにつながった。これらの行動は、2月9日の艦内における行動ぶりに不適切に略式化が有ったことを示している。（FF 16, 30, 37, 47, 55-58, 82, 102, 111, 151, 184, 194, 203, 220, 223, 224, 324, 326, 327, 346, 356, 363, 364, 366）。

40. 艦長は、自分の手で操艦すること及び午後の航行案内を民間人招待者達に説明する事に焦点を当てていた為、ソーナーと火器管制装置からの衝突事故を未然に防いでくれていたかも知れない重要な情報を看過した。（FF 86, 89, 92, 101, 102, , 110, 111, 132, 136, 144, 150, 151, 156-160, 163, 164, 176, 177, 184, 194, 202, 203, 217, 223, 224）。

主題： [2001年2月9日にハワイ州オアフ島の沿岸沖で発生した合衆国船
グリーンヴィル（SSN772）と日本国内燃機関船えひめ丸間
の衝突の周辺状況に対する査問委員会による審理]

41. 時間をかせぐとは言え実質的に全行動に手を下し、首を突っ込むこと（例：実行上の操艦をとる、目標運動解析の一行程を短縮する、標準的ではなく簡略化された潜望鏡搜索を実施する等）によって、艦長は再三にわたって主要な当直員を周回的に扱い、及び運用上、安全上の手順に明記された考慮事項を省略した。（FF 86, 89, 92, 101, 110, 111, 125, 129, 132, 138, 140-142, 144, 150, 151, 156-164, 166, 171, 172, 176, 177, 179-182, 184, 194, 196, 202-204, 217, 223, 224）。
42. 艦長は、2回にわたるソーナー室における通り一遍の説明と、一度火器管制装置の表示面を見ただけで、探知状況に関する不十分な理解しなかった。艦長は当直員を使って目標に関する自分の理解が正しいかどうかを確認しようとはしなかった。このことによって、艦長は衝突回避に繋がる重要な目標情報を有している当直員からの重要な支援を自ら否定した。さらに、部下の状況認識の正誤を評価する機会を否定した。（FF 86, 87, 89, 92, 136, 144, 157, 164）。
43. アナログ式信号映像表示モニターが使用できないことは、発令所からの目標の状況認識を維持すると言う艦長の能力を低下させた。艦長、当直員、いずれもこのモニター不在に肯定的な行動はとらなかった。仮にそのような行動がとれていれば、艦長及び哨戒長が更なる有効な水上目標状況を維持することも可能であったかも知れない。（FF 45）。
44. 艦長はさらにモニターが使用不可能なため別の手段をこうじて目標処理を熟考しようとかりたてられるべきであった。（FF 45）。
45. グリーンヴィルの指揮系統は無資格のソーナー員の規定に基づいた資格を付与しないで立直を許可するべきではなかった。（FF 64, 66, 67）。
46. ソーナー員に無資格者を立直させることを許可することは、目標処理関係者にとっての所要の訓練、有資格者としての経験等を否定するものであった。（FF 64, 66, 67）。

主題： [2001年2月9日にハワイ州オアフ島の沿岸沖で発生した合衆国船
グリーンヴィル（SSN772）と日本国内燃機関船えひめ丸間
の衝突の周辺状況に対する査問委員会による審理]

47. 副長は下士官当直表の準備、当直要領等に関して適切な指揮監督を実施しなかった。副長としては以下のような欠落点に対して責任を有する。

a. 2月9日の当直表は、そのとおりに実行されていなかった。13人中9人の当直員が指揮系統上の報告及び許可なくして臨時に変更されていた。

b. 無資格のソーナー員が当直表に載っており、2月9日の当日予定表には当該ソーナー員を無資格者と記載していたにも係わらず、衝突時にこの人間が実際に立直していた。

c. 当直員教育は不十分であり、発令所当直員とソーナー当直員間の連携は欠如していた。(FF 64, 66, 67, 132, 137, 150, 158, 160, 166)。

48. 副長は哨戒長が5分以内で潜望鏡深度に着くという、時間短縮を哨戒長に課すということに関する懸案を艦長と討議しなかった。また、新たな目標（S-14）の解析評価のために目標運動解析の一行程を実施するよう進言することも怠った。(FF 132, 158, 160, 166)。

49. 艦長による急速すぎる予定行動の消化と、太平洋潜水艦隊幕僚長及び多数の民間人招待者の存在は、副長の強力に支援する能力を減少させることとなった。(FF 78-85, 89, 92, 101, 103, 110, 132, 136, 138, 144, 145, 157-10, 162-166, 176, 194, 196, 197, 199, 202-206, 208)。

50. 前任海曹は下士官の当直表の作成者としての適切な職務を果たさなかった。また当直員の立直要領についての適切な指揮監督を怠った。前任海曹としては以下のような欠落点に対して責任を有する：

a. 2月9日の当直表は、そのとおりに実行されていなかった。13人中9人の当直員が指揮系統上の報告及び許可なくして追加補足的に変更されていた。

主題： [2001年2月9日にハワイ州オアフ島の沿岸沖で発生した合衆国船
グリーンヴィル（SSN772）と日本国内燃機関船えひめ丸間
の衝突の周辺状況に対する査問委員会による審理]

b. 無資格のソーナー員が当直表に載っており、2月9日の当日の予定表には当該ソーナー員を無資格者と記載していたにも係わらず、衝突時には実際に立直していた。(FF 64, 66, 67).

51. 前任海曹は、所要の有資格者を当直に配員していなかった。また行動と駆動中の当直表及び日付予定表との整合を怠っていたという点では艦長に対する最大限の支援を行わなかった事になる。(FF 64, 66, 67).

52. 艦長は衝突にいたるまで、上下運動航行開始時から、哨戒長から実行上の操艦をとった。哨戒長は以後、操艦に関する艦長の指示を操舵員等に伝える事実上の伝声管となった。(FF 101, 102, 110-112, 132, 145, 151, 159, 160, 163-165, 194, 211, 215, 216, 220, 224).

53. 哨戒長は経験が少なくかつ慎重であり、当直業務に対して系統的に思考することから、艦長による急速すぎる予定行動の消化と、太平洋潜水艦隊幕僚長及び多数の民間人招待者の存在は、哨戒長の強力に支援する能力を減少させることとなった。(FF 16, 18, 57, 77-85, 89, 92, 95, 101-103, 110, 111, 132, 136, 138, 144, 145, 150, 151, 157-160, 162-166, 176, 177, 194, 196, 197, 199, 202-206, 208, 216, 217, 220, 224, 363, 364, 366, 399, 417, 429, 430).

54. 哨戒長は潜望鏡深度においては適切な初期探索を実施したが、その後の探索を完了するのに必要な十分な時間と機会を艦長は与えなかった。哨戒長の系統的かつ慎重な姿勢があれば、えひめ丸を発見していたであろうと思料する。(FF 18, 179, 180, 183, 186, 191, 193, 194, 422).

55. 5分以内に潜望鏡深度につくようにという艦長の指示を急いで実行している過程において、哨戒長はグリーンヴィル艦長標準指示によって求められている潜望鏡探索の要旨説明を実施しなかった。実施しなかったことによって、乗員は、通常ソーナー員から提供される重要目標及び海面状況に関する情報を受け、評価するという重要な機会を失った。(FF 132, 138).

主題： [2001年2月9日にハワイ州オアフ島の沿岸沖で発生した合衆国船
グリーンヴィル（SSN772）と日本国内燃機関船えひめ丸間
の衝突の周辺状況に対する査問委員会による審理]

56. 哨戒長は上下航行を実施する前に、水上目標に対する目標運動解析を得るための艦の運動について積極性を欠いていた。その結果、午後の早い時期の火器管制装置の解析結果は目標番号 S-13 が近距離でなく遠距離目標であるという誤った識別を犯してしまった。(FF 71, 72, 74, 76, 90).

57. ソナー指揮官は上下航行前に、目標に対するの好解析結果が得らる針路・速力の進言を実施せず、哨戒長の支援を怠った。その結果、午後の早い時期に火器管制装置の解析結果は目標番号 S-13 が近距離でなく遠距離目標であるという誤った識別を犯してしまった。(FF 71, 72, 74, 76, 90).

58. 無資格のソナー当直員及び民間人招待者の監視をするという追加責務が、2月9日にソナー監督員から探知目標の全体図を把握しておくという能力を阻害した。(FF 66-68, 74).

59. 火器管制当直官は姿勢変換前に探知目標に関する良好な目標運動解析を得るための針路・速力を哨戒長に進言することを怠った。その結果、午後の早い時期に火器管制装置の解析結果は目標番号 S-13 が遠距離目標であるという誤った識別を犯してしまった。

60. 火器管制当直官は海軍戦闘準則類及びグリーンヴィル艦長常備命令規定に添った探知目標解析作図を適切に維持することを怠った。(FF 77).

61. グリーンヴィル艦長常備命令規定に基づいて、火器管制当直官が目標の探知及び目標情報を哨戒長に報告していたならば、衝突事故は未然に避けられた可能性がある。(FF 171, 172, 217).

62. 火器管制当直官とソナー監督官が艦長、哨戒長と連携をとり、適切な水上目標状況を開発していたならば、衝突事故は未然に避けられた可能性がある。(FF 45, 49, 50, 63-67, 74, 76, 77, 92-94, 101, 110, 111, 129, 132, 136, 138, 140-145, 149, 150, 157-160, 162-164, 166, 171, 172, 176, 194, 199, 202, 203, 206, 208, 217).

63. 火器管制当直官は新たな目標である、目標番号 S-14 の探知状況の調整に迫られて、目標番号 S-13 の処理がおろそかになっていた。このことは、すべての探知目標に関する情報を適切に見直すという職務を全うしていなかったことで、全く弁解の余地がないことである。(FF 152, 170-176).

主題： [2001年2月9日にハワイ州オアフ島の沿岸沖で発生した合衆国船
グリーンヴィル（SSN772）と日本国内燃機関船えひめ丸間
の衝突の周辺状況に対する査問委員会による審理]

64. 緊急潜航の間に火器管制当直官が艦長、哨戒長に解析結果として、目標番号 S-13（えひめ丸）までの距離は 4000 ヤードであることを報告していたら、衝突事故は回避されていた可能性はある。（FF217）。

65. 火器管制当直官 no S-13 の距離を 4000 から、9000 ヤードに変更した行為の結果 99 ノットという感知できない速度の解像となってしまった。この管制写真はこの数字を不適切にも合理的な分析もせず火器管制装置に入力した。

66. グリーンヴィルの艦長と乗員が行動危機管理の基本理念を実践さえしていれば、この衝突はさけることができたか知れない。（FF 45, 49, 50, 63-67, 74, 76, 78-85, 89, 92-94, 101, 103, 110, 111, 125, 129, 132, 136, 138, 140-145, 149, 150, 157-166, 171, 172, 176, 179-182, 194, 196, 197, 199, 202-206, 208, 217）。

II. 搜索救助活動

67. グリーンヴィルの行動は搜索救助調整役として適宜適切なものであった。（FF 239, 241, 244-246, 248, 249, 251, -255, 258-261, 263）。

68. グリーンヴィルは潜水艦固有の特性から、非常に限定された搜索救助能力しか有していなかった。（FF 293）。

69. グリーンヴィルは太平洋潜水艦隊及び米沿岸警備隊の搜索救助に関する対応はすべての分野において迅速且つ有効的であった。（FF 239, 241, 244-246, 248, 249, 251-255, 258-261, 263, 266, 268-270, 272, 275, 276, 280, 281, 284, 286, 288, 289, 291, 292）。

III. 太平洋潜水艦隊及びグリーンヴィルが実施した海軍招待者体験航海プログラム

70. 招待者体験航海は海軍及び海軍の任務の一般への公報効果促進の一助、及び海軍、米国民双方への貢献として今後も継続するべきである。（FF 294, 295, 303, 310, 311）。

主題： [2001年2月9日にハワイ州オアフ島の沿岸沖で発生した合衆国船
グリーンヴィル（SSN772）と日本国内燃機関船えひめ丸間
の衝突の周辺状況に対する査問委員会による審理]

71. 海軍長官及び海軍作戦本部の民間人の体験航海に関する方針は不明瞭、錯誤の恐れがあり、内部矛盾かつ重複したものである。（FF 296-302）。

72. 2月9日のグリーンヴィル体験航海に関する太平洋潜水艦隊の許可は海軍省通達 5720.44A（体験航海を実施するために艦艇等を単独で行動させることを禁止する内容）及び海軍作戦本部通達 5720.2L（体験航海を実施するために艦艇の行動予定を強引に変更することを禁止する内容）に反するものであった。しかしながら、個人的及び経費的投入をした今回の民間招待者に対する体験航海の実施は、海軍の体面を保つためにも納得できるものであった。（FF 299, 305, 308, 328, 332, 336-338, 344-346）。

73. 海軍作戦本部通達 5720.2Lの明確な規定によると、太平洋潜水艦隊は2月9日の招待者体験航海の許可権者ではなかった。太平洋艦隊司令部通達は、民間人の体験航海に関する権者はタイプ司令官に代表されるという点で、漠然かつ混乱をきたすものである。（FF 299, 305）。

74. 潜水艦の任務の特殊性及び構造は招待者体験航海の実施に関する海軍省及び海軍作戦本部の方針等を遵守することを困難にしている。（FF 295, 302）

75. 太平洋潜水艦隊における招待者体験航海に関する適切な指導監督が欠如していた。搭乗員数、艦艇の行動計画、航海中の行事及び艦艇による展示の適合性等についての方針が欠如している。（FF 309, 314, 315, 318, 320, 322）。

76. 太平洋潜水艦隊においては、民間人招待者の搭乗中の深度、速度といった極秘情報に関する保全についての方針が欠如している。（FF 58, 309, 315, 319, 320, 322）。

77. 太平洋潜水艦隊においては、他部隊等が実施した体験航海の教訓、情報等を広く配布するまたは共有するという点については重要な意味を持っていなかった。（FF 322）

主題： [2001年2月9日にハワイ州オアフ島の沿岸沖で発生した合衆国船
グリーンヴィル（SSN772）と日本国内燃機関船えひめ丸間
の衝突の周辺状況に対する査問委員会による審理]

78. 2月9日に搭乗していた民間人招待者は、一般的な意味での体験航海に関する海軍省
通達及び太平洋潜水艦隊広報部の目的資格を有していた。(FF 328, 330, 333, 337).

IV. 2月9日のグリーンヴィル行動海域の適合性

79. 2月9日にグリーンヴィルが指定された行動海域は単独の潜水艦行動のために適切
なものであった。海域は地元の汽船及び漁船等がたまに航行する海域にあり、常用航路とし
て知られている航路の南側であった。(FF 382-395). (FF 374, 385-395).

80. ハワイ周辺の行動海域は潜水艦の訓練には極めて重要である。この周辺には、潜水艦
の任務の実施、運動試験及び緊急時の訓練等に必要な十分な深度を有した広い海域が存在
する。(FF 374, 385-395).

81. ハワイ周辺の行動海域の中でもパールハーバーの南側で比較的近距離の海域は、通常
の乗員訓練、演習、検閲、検定及び体験航海等には、極めて便利でありかつ経済的である。(FF
384-395).

82. 国家海洋行政局（#19340）海図上に記載されている「潜水艦試験海域」はこの指定
はもう使われていないので問題とならないよう除去されるべきである。(FF 396-398).

V. 太平洋潜水艦隊幕僚長の役割

83. ブランドヒューバー大佐は2月9日の体験航海中では太平洋潜水艦隊司令官の代理で
はなくグリーンヴィル艦長に対する上級職権者ではなかった。(FF 401, 408-410).

84. グリーンヴィルの潜望鏡深度への浮上に対して必要以上の注意を喚起しないという
ブランドヒューバー大佐の判断は、グリーンヴィルが過去にも2度ほど困難な条件下にお
いて十分な性能を発揮したこと、及び艦長が潜望鏡深度につくところを何度も見たことが
あるという点からは合理的なものであった。(FF 113, 418-421).

主題： [2001年2月9日にハワイ州オアフ島の沿岸沖で発生した合衆国船
グリーンヴィル（SSN772）と日本国内燃機関船えひめ丸間
の衝突の周辺状況に対する査問委員会による審理]

85. グリーンヴィルが潜望鏡深度につくまでの間の水上目標状況に関する状況認識がなされておらず、ブランドヒューバー大佐は衝突に至る一連の事案の間に介在する立場にはなかった。(FF 113, 418-421).
86. ブランドヒューバー大佐は、民間人に対して試験深度、最大速力の展示をするというワドル中佐の判断に疑問を抱くべきであった。(FF 58, 406, 416).
87. ブランドヒューバー大佐は、ビデオ表示モニターが使用不可能であることを知った時に、その代替策としていかなる方策をとろうとしているのかについて、グリーンヴィルの指揮系統上の説明を求めるべきであった。(FF 406, 411, 414).
88. ブランドヒューバー大佐から太平洋潜水艦隊司令官職務及び幕僚長職務のカイル大佐への委譲は非公式なものであった。カイル大佐は、ブランドヒューバー大佐がグリーンヴィルに乗艦中の際、太平洋潜水艦隊幕僚長の代理を努めると理解していたが、太平洋潜水艦隊司令官職まで代理を努めるとは認識していなかった。太平洋潜水艦隊には、ブランドヒューバー大佐がグリーンヴィルに乗艦して不在時の指揮についての統一見解はなかった。(FF 267, 401).
89. ブランドヒューバー大佐は2月9日の体験航海に出航した際の、自分自身の公的な役割について明確ではなかった。(FF 400, 401, 404-407, 411, 434).
90. ブランドヒューバー大佐は、太平洋潜水艦隊広報部が実施している業務の細部に関する理解が十分ではなかった。太平洋潜水艦隊幕僚長として、当該業務に対して適切な幕僚、部隊指導を実施するということを怠った。(FF 308, 309, 315, 318, 320, 322, 403).
91. ブランドヒューバー大佐の2月9日の体験航海への、自分自身の乗り組みに関する正式な文書処理を怠った事から、艦内の略式的雰囲気許してしまった。(FF 405-407, 411).
92. ブランドヒューバー大佐は援助活動実施中においては、適宜適切な行動をとった。

主題： 「2001年2月9日にハワイ州オアフ島の沿岸沖で発生した合衆国船グリーンヴィル (SSN722)と日本国内燃機関船えひめ丸間の衝突の周辺状況に対する審問委員会による審理」

諸勧告

I. 衝突

1. 合衆国太平洋艦隊司令官がグリーンヴィルの艦長スコット・D・ワドル中佐を2月9日の彼の行為への引責の為アドミラルズ・マスト（司令官による行政的懲戒処分裁定）に送る事。彼のその日の怠慢から生じた深刻かつ苦痛な結果に留意する一方、彼の側の犯意あるいは故意の違法行為が不在のため、当委員会は軍法会議に反対との勧告を行なう。彼の諸行為は怠慢かつ不注意であり、指揮を司る士官に期待される高い基準からのゆゆしき離脱を意味するもので有ったものの軍法会議をもって裁くことを是認するほどに言語道断なものではなかった。この勧告に達するにあたり、委員会はワドル中佐の20年間にわたる海軍及び国家に対する献身的で忠実な働きについても考慮した。
2. 合衆国船グリーンヴィルの新しい艦長が火器管制技術当直員パトリック・T・シークレスト一等海曹を2月9日の彼の行為への引責の為キャプテンズ・マスト（艦長による行政的懲戒処分裁定）に送る事。さらに追加として、シークレスト兵曹が火器管制技術当直員として次の航海での当直に立つ前に、再度その資格の認可裁定申請を行なわせる事。
3. 合衆国船グリーンヴィルの新しい艦長が副長ジェラルド・K・ファイファーを下士官当直員命令書に対する監督不行き届き及び有資格人員のみしか当直に立つことを許さぬ事の確保の不履行に対する引責の為諭告する事。
4. 合衆国船グリーンヴィルの新しい艦長が哨戒長マイケル・J・コーエン中尉を監督不行き届き及び当直に立った際の細部への注意の欠如の引責の為諭告する事。
5. 合衆国船グリーンヴィルの新しい艦長が前任海曹ダグラス・コフマン兵曹長を指揮系統への説得力ある支援の欠如、下士官当直員命令書の監督不行き届き、かつ有資格人員のみしか当直に立つことを許さぬ事の確保の不履行に対する引責の為諭告する事。
6. 合衆国船グリーンヴィルの新しい艦長がソーナー員長エドワード・マクギボニー一等兵曹を不十分な当直任務遂行及び探知目標チームへの不十分な支援、又

主題： 「2001年2月9日にハワイ州オアフ島の沿岸沖で発生した合衆国船グリーンヴィル (SSN722)と日本国内燃機関船えひめ丸間の衝突の周辺状況への審問委員会による審理」

有資格人員のみしかソーナー室での当直を許さぬ事の確保の不履行に対して引責の為諭告する事。さらに加えて、マクギボニー兵曹がソーナー員長当直員として次の航海での当直に立つ前に、再度その資格の認可裁定申請を行なわせる事。

7。太平洋潜水艦隊司令官が有資格ソーナー員達のみがソーナー当直に立てる事を許可する旨を定めている大西洋潜水艦隊 (COMSUBLANT) ・太平洋潜水艦隊 (COMSUBPACINST 5400.40A) 条、及び海軍標準準則 (NWP 3-21.22.3) 条の基準への遵守を確保する事。

8。太平洋潜水艦隊司令官が現在の「行動危機管理プログラム」の適切さについて検討する事。

9。太平洋潜水艦隊司令官がグリーンヴィルの衝突について艦隊に対して情報と訓練を提供する事。

10。太平洋潜水艦隊司令官が潜水艦小艦隊代将達及び彼らの幕僚達が非展開時訓練標準訓練周期の期間中に有意義な監督と客観的なフィードバックを彼らの潜水艦艦長達及び乗組員達に対して提供する能力及び手段について再調査する事。

II. 搜索及び救助活動

11。太平洋潜水艦隊司令官が潜水艦の広洋搜索・救助活動能力及びその諸要件についてタイプ司令官のリーダーと共に検討するための調整役を努め、かつ海軍作戦本部 (OPNAV) に対して適切な勧告書を作成する事。

III. 潜水艦隊及び合衆国船グリーンヴィルによる海軍訪問客体験航海プログラムの実施。

12。海軍の訪問客体験航海プログラムが引き続き支援される事。

13。太平洋潜水艦隊司令官が艦隊の広報活動担当士官を太平洋潜水艦隊の訪問客体験航海プログラムに関して適切な幕僚の監督及び指標の提供を怠ったことに対する引責の為諭告する事。

14。太平洋潜水艦隊司令官が民間人訪問客体験航海プログラムに関する「海軍広報活動部」の方針と指標の徹底的な再検討を行なうにあたり、海軍作戦本部及び情報主任との調整役を努め、かつ内部的に一貫性を持つ、明確にして、より特定の新しい指標を発行する事。

主題： 「2001年2月9日にハワイ州オアフ島の沿岸沖で発生した合衆国船グリーンヴィル (SSN722)と日本国内燃機関船えひめ丸間の衝突の周辺状況への審問委員会による審理」

15。太平洋艦隊司令官が海軍作戦本部に対して訪問客体験航海プログラムの承認権威者はそれをタイプ司令官に委任することが出来るように勧告する事。

16。太平洋潜水艦隊司令官が、タイプ司令官 (TYCOM) リーダーとの調整により訪問客体験航海に関して潜水艦行動の独特な性質を反映する公報活動指示書への変更を海軍作戦本部に対して勧告書を送付する事。

17。太平洋潜水艦隊の公報活動事務所が訪問者体験航海に関する適切な監督及び指標を艦隊に対して提供する事。

18。太平洋潜水艦隊が訪問者体験航海中にはどのようなデモンストレーションが行なわれるべきかについて適切な諸航行について検討する事。

19。太平洋潜水艦隊が訪問者体験航海には秘区分とされ、かつ相応しく無いものとされている航行深度及び速度の限界について艦隊に最強調する事。

20。太平洋潜水艦隊が訪問者体験航海経験に関するフィードバックを太平洋潜水艦隊中に普及させる正式な手段、もしくはそれらに関する情報を太平洋潜水艦隊中で分け合う正式な手段を確立する事。

IV. 2月9日の合衆国船グリーンヴィルの行動海域の適否

21。太平洋潜水艦隊司令官が三年ごとに合衆国沿岸警備隊及びその他の適切な政府部局と共にハワイの行動海域海上交通密度について検討する事。

22。太平洋潜水艦隊司令官が国家海洋行政局との調整により「潜水艦実験及び公試区域」という言及を国家海洋行政局の「ハワイからオアフ」海図 (#19340) 及び他の軍人及び民間人海員達が使用している全航海図から取り除く事。

V. 潜水艦隊幕僚長の役割

23。太平洋潜水艦隊司令官が彼の幕僚長ロバート・ブランドヒューバー大佐を彼の職務のプロフェッショナルな遂行における怠慢、かつ2月9日の日の責務における怠慢の引責の為諭告する事。この諭告が、グリーンヴィルに乗船する以前に彼の幕僚長としての職務を適切に引き渡す行為における怠慢、潜水艦の行動深度及び速度に関する潜水艦隊の区分基準の強化における怠慢、かつ、潜水艦隊

主題： 「2001年2月9日にハワイ州オアフ島の沿岸沖で発生した
合衆国船グリーンヴィル (SSN722)と日本国内燃機関船えひめ丸間
の衝突の周辺状況への審問委員会による審理」

訪問者体験航海プログラムに関して適切な幕僚の監督及び指標の提供を行なうに
あたったの怠慢についてのものである事を、具体特定的に指摘して行なう事。

24。ブランドヒューバー大佐が彼の体験航海覚え書きを強化するか、もしくは
取り消すかのいずれかを行なう事。彼が強化すると決めた場合には、それを再検
討し直し、訪問客体験航海を含む全区分の航海に適切に確実に言及する事。

25。ブランドヒューバー大佐が幕僚士官が彼を継続して指揮を執る場合にはい
つも必ず太平洋潜水艦隊司令官代理の職務及び責務に関する徹底した説明を行な
う事。

26。太平洋潜水艦隊司令官が士官が継続して指揮を執る場合にはいつも必ず誰
が太平洋潜水艦隊司令代理であるのかを艦隊に対して明確に識別する事。

(署名)
ジョン・ナスマン
合衆国海軍中将
委員長

(署名)
ポール・F・サリヴァン
合衆国海軍少将
委員

(署名)
デイヴィッド・M・ストーン
合衆国海軍少将
委員

(署名)
イサム・オザワ
海将補
日本国海上自衛隊
非投票委員

公証

(署名)
ジョン・B・ナスマン
合衆国海軍中将
委員長

(署名)
ブルース・E・マクドナルド
合衆国海軍法務部、大佐
委員会弁護人